

越道遺跡



2007

長野県辰野町教育委員会

地域優良賃貸住宅辰野町平出団地建設に先立つ緊急発掘調査

越道遺跡

2007

長野県辰野町教育委員会



調査区遠景

卷頭図版2



第2調査区1層目



第1調査区



第2調査区 2層目

卷頭図版4



第2調査区3層目



第2調査区4層目

序

平出地区は遺跡の数が多く、内容においても質、量ともに豊富な地域です。古くは約36,000年前といわれる「原牛の臼歯化石」が出土した丸山地籍をはじめ、縄文時代早期の押型文土器を伴う集落が発見された小田原遺跡、「平井手牧」との関係が注目される半平蔵遺跡などが存在します。

越道遺跡は、中央自動車道の建設に先立って行われた発掘調査で、その内容の一部が明らかになって以来、調査の手は入っていませんでした。

今回、町営住宅の建て替えに伴う調査を実施しましたが、縄文時代前期の住居址をはじめ、縄文時代後期の土坑墓が出土するなど、貴重な調査成果をおさめることができました。中でも縄文時代後期の土坑墓については、上野川の対岸に位置している平出丸山遺跡から出土した石棺墓との関連について、大きな課題が残されています。

今回ここに発掘調査報告書を刊行する運びとなりましたが、その調査成果をどのように普及公開し、地域の歴史解明に役立てていくのかといった課題はまだまだ克服できていません。今後さらなる努力をしていかなくてはならないと考えております。

末筆になりましたが、最低気温が零下15度となる厳しい寒さのなかでも、埋蔵文化財保護のために懸命に発掘調査に従事していただいたみなさんに敬意を表すると共に、篤く御礼を申し上げます。

辰野町教育委員会

教育長 古村 仁士

例　　言

1. この報告書は、地域優良賃貸住宅辰野町平出团地建設工事に先立って実施した長野県上伊那郡辰野町大字平出2355番地2他に所在する越道遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、辰野町長矢ヶ崎克彦と、辰野町教育委員会教育長古村仁士の委託契約に基づき、実施した。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 発掘調査は平成19年9月20日から平成20年4月2日まで現場の作業を行い、調査と平行して遺物整理を行い、平成20年12月16日までの間、報告書の作成を実施した。
4. 発掘現場における記録は福島永が担当し、遺構等の実測図の作成は板倉裕子、大森淑子、早川裕美子が行い、遺物の台帳作成・接合は村上茂子が主として行った。また、実測図及びトレースの作成は赤羽弘江、板倉裕子、大森淑子、佐藤直子、竹内みどり、早川裕美子が行った。
5. 今回の調査では、期間の短縮を測るために、さまざまな方法で遺構測量を実施した。そのためオルソ写真から製図した測量図には「O」、写真測量を行った測量図には「S」を図右下に付している。なお、記号を付さない測量図は、トータルステーションを使用しての測量及び簡易造り方での測量である。
6. 本報告書は限られた期間内で編集しなくてはならず、遺構、遺物の検討を行う時間的余裕がなかった。このため、遺構については、整理段階では大きな傾向を捉え、遺物については遺構内出土のものに主眼をおいて整理作業を行わざるを得なかつた。このことは、縄文時代後期と考えられる礫遺構等の全体像の把握や、それらに伴うと考えられる、遺構検出作業中に出土した遺物の掲載を断念した事を意味する。出土している当該期の資料の量を考えると、この状況では遺跡に正確な評価を与えることが困難と考えられるため、再検討を加えたうえで、将来何らかの方法で公開する予定である。
7. 調査時及び、整理時に作成した実測図及び写真は、辰野町教育委員会で保管している。
8. 調査期間中、百瀬長秀氏には様々なご指導を賜った。記して感謝申し上げる。また、遺構の測量について、㈲M2クリエーションには様々な助言を賜った。

発掘調査関係者名簿

調査主体者	古村 仁士（辰野町教育委員会教育長）
事務局	白島 義政（辰野町教育委員会教育次長） 原 健一（辰野町教育委員会教育次長補佐兼文化係長）
発掘調査協力者	福島 永（辰野町教育委員会文化係）発掘調査担当者 板倉 裕子、大森 淑子、高木 四郎、早川裕美子、宮原 荘二、山崎 誠、 村上伊那広域シルバー人材センター（小沢さと志、栗原 孚夫、小池 貞子、 山寺 勉）
整理作業協力者	赤羽 弘江、板倉 裕子、大森 淑子、佐藤 直子、竹内みどり、早川裕美子、 村上 茂子

目 次

序 例 言

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
1. 位置と付近の地形・地質	1
2. 歴史的環境	3
第Ⅱ章 調査の経緯と経過	5
1. 保護協議の経過	5
2. 発掘調査の経過	5
第Ⅲ章 発掘調査	6
1. 調査の方法	6
第Ⅳ章 遺構と遺物	7
1. 住居址	7
2. 埋設土器	23
3. 集石炉	23
4. 土坑	24
5. 集石	49
6. 環状列石	50
7. 配石址	52
8. 環状列石群	53
9. その他の遺構と遺物	60
第V章 ま と め	62

報告書抄録

- 付図1 越道遺跡 第I調査区全体測量図
- 付図2 越道遺跡 第II調査区第2層全体測量図
- 付図3 越道遺跡 第II調査区第3層全体測量図
- 付図4 越道遺跡 第II調査区第4層全体測量図

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第29図 土坑実測図(7)	32
第2図 周辺遺跡分布図	4	第30図 土坑実測図(8)	33
第3図 第1号住居址実測図(1)	7	第31図 土坑実測図(9)	34
第4図 第1号住居址実測図(2)	8	第32図 土坑実測図(10)	35
第5図 第1号住居址出土遺物(1)	9	第33図 土坑実測図(11)	36
第6図 第1号住居址出土遺物(2)	10	第34図 土坑実測図(12)	37
第7図 第1号住居址出土遺物(3)	11	第35図 土坑出土状況図(1)	38
第8図 第4号住居址出土遺物(1)	12	第36図 土坑出土状況図(2)	39
第9図 第2号住居址実測図	13	第37図 土坑出土状況図(3)	40
第10図 第2号住居址出土遺物(1)	14	第38図 土坑出土状況図(4)	41
第11図 第2号住居址出土遺物(2)	15	第39図 土坑出土状況図(5)	42
第12図 第2号住居址出土遺物(3)	16	第40図 土坑出土状況図(6)	43
第13図 第4号住居址実測図	17	第41図 土坑出土遺物(1)	44
第14図 第4号住居址出土遺物(2)	18	第42図 土坑出土遺物(2)	45
第15図 第4号住居址出土遺物(3)	19	第43図 土坑出土遺物(3)	46
第16図 第4号・第5号住居址出土遺物	20	第44図 土坑出土遺物(4)	47
第17図 第4号・第5号住居址出土遺物 および第4号住居址実測図	21	第45図 土坑出土遺物(5)	48
第18図 第5号住居址実測図	22	第46図 集石実測図	49
第19図 埋設土器出土遺物	23	第47図 環状列石1実測図	50
第20図 埋設土器・第1号集石炉実測図	23	第48図 環状列石2実測図	51
第21図 第72・73号土坑出土遺物	24	第49図 環状列石3実測図	52
第22図 土坑実測図(1)	25	第50図 配石址1実測図	54
第23図 土坑実測図(2)	26	第51図 配石址2実測図	55
第24図 土坑上層出土隕実測図	27	第52図 配石址上層断面図	56
第25図 土坑実測図(3)	28	第53図 磬群実測図(1)	57
第26図 土坑実測図(4)	29	第54図 磬群実測図(2)	58
第27図 土坑実測図(5)	30	第55図 磬群実測図(3)	59
第28図 土坑実測図(6)	31	第56図 第4号住居址上層出土状況図	60
		第57図 第4号住居址上層出土遺物	61

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

1. 位置と付近の地形・地質

(1) 地 形

辰野町は、南北約70kmの伊那谷の北端部、長野県のはば中央部に位置する。また、西を木曾山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる標高1,100m以上の6つの山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は天竜川の支流の一つである沢底川を境として南部は標高700～1,200mの小式部城山塊、北部は標高800～1,000mの東山丘陵に二分されており、辰野町で最もなだらかな丘陵状の山地となっている。

一方、諏訪湖に源を発する天竜川は、数段の断層崖に挟まれて、その最低部を南流しており、平出地籍には2～3段の段丘が形成されている。なお、第一段丘面の平出丸山地籍では、昭和38年7月に中期テフラの第3浮石層直下から、長野県天然記念物の原牛の臼歯12枚が発見されている。これらの段丘の山麓部には扇状地の発達が顕著であり、特に倫沢山～桑沢山麓では複合扇状地が形成されている。しかし、東部地区では概して扇状地の発達は少なく、真金寺付近に小規模な複合扇状地が形成されているにすぎない。東部地区で一番大きな扇状地は上野川によって形成されており、平出上町から下町までをその範囲としているが、これらの扇状地は、上層にテフラが厚く堆積していることから形成された時期も古い。

また、更新世後末期の台地の急激な上昇によって山地と平地の高度差が増大し、支流の勾配がきつくなり、上野川でも扇状地を深く開析し、扇状地面を段丘化するようになった。また、上野川沿いには幅100m前後の谷底平野が発達し、現在そのほとんどが水田として利用されている。

なお、越道遺跡はこの扇状地の扇端部で、上野川が天竜川と合流する付近の左岸に位置している。

(2) 地 質

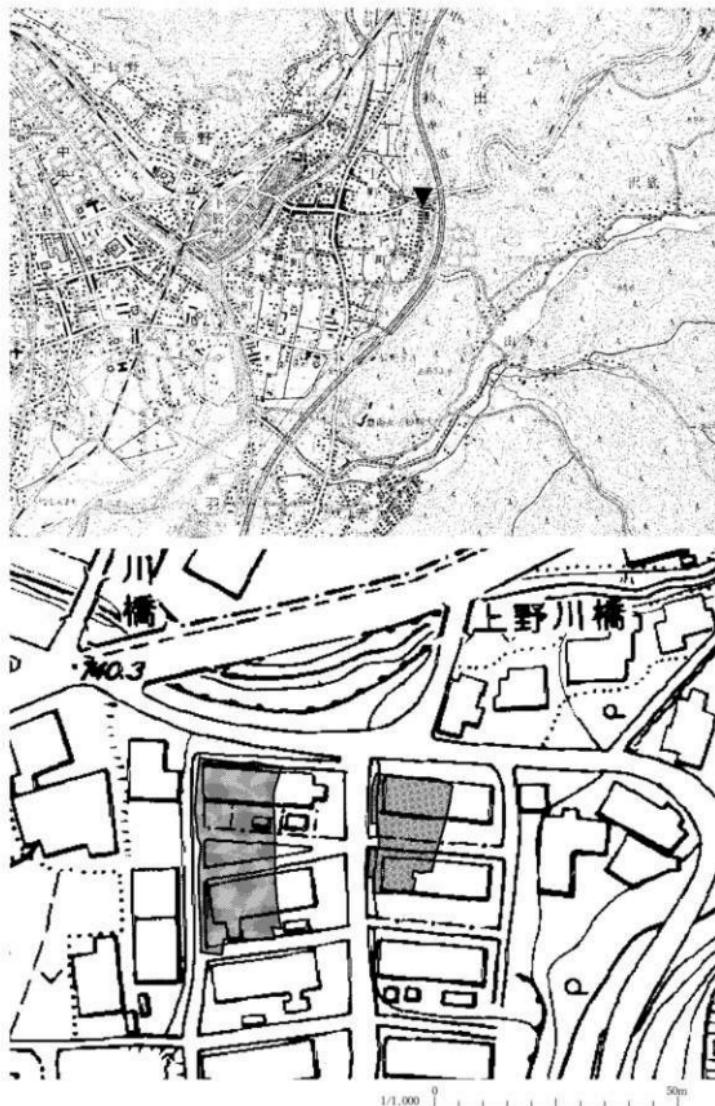
長野県はその中央部に日本を代表する大断層である糸魚川～静岡構造線がはしり、その東部にフォッサマグナが存在している。また、南部には中央構造線が東西に縱走し、地質学的には非常に複雑な構造を呈している。辰野町はこれらの構造線に近い地点に位置し、地質的には西南日本内帯の東端部にあたる。このため、赤石山脈は辰野町南部で途切れ、木曾山脈の花崗岩についても辰野付近で途切れている。

辰野地域は大陸縁辺部で形成された堆積岩を基層とし、東部地域ではその上部に沢底層と呼ばれる領家帯があり、その後に、赤羽層や、塩巻累層といった砂礫層や、火山泥流堆積物が堆積している。さらに、それを諏訪湖ができる以前に諏訪地方の山々から流入してきた、平出層といわれる砾層がおおっている。

東山丘陵は、山地を作る塩巻累層と、それらを削って形成された谷底平野に堆積したはんらん原堆積物によつて構成されている。

また、伊那谷西部や東部の山麓には大きな断層が走っており、特に西部の断層は「伊那谷断層群」と呼ばれ、数多くの断層崖、ケルンコル、ケンバットが存在している。また、東部山地の真金寺北の林道では、山道に入つて間もないところに約30mのうちに3本の大きな断層が存在している。

なお、横川川や、小横川川は、奈良井川と同様に北に向かって流れる川であったものが、断層が動いたために南流するようになった様子が伺える。このため、権兵衛峠～経ヶ岳～牛首峠の連なりが南北分水界となり、これより北部は千曲川水系として日本海へと流れ込み、南部は天竜川水系として太平洋へと注ぎ込んでいる。



第1図 道路位置図

2. 歴史的環境

越道遺跡は諏訪神社上社の外県神使廻瀬神事の際に通ったと考えられる有賀峠の辰野側の上り口部分に位置し、中央自動車道の建設に先立って行われた試掘調査の折にも、直径4.5cmの石製円盤が出土している。

この遺跡の上野川の対岸に位置する平出丸山遺跡（150）は、昭和57年から昭和58年にかけて保育所の改築工事に伴って発掘調査が実施され、縄文時代後期加曾利B式を中心とした石棺墓5基をはじめ、早期の押型文土器や条痕文土器が出土している。なお、石棺墓はその上部から大規模な集石が出土している。また、隣接する原田遺跡（135）からは早期の押型文土器が採取されている。

大石平遺跡（154）は上野川が平出の扇状地を流れ出る手前、越道遺跡の東に存在する越道山山頂にあり、中期初頭の土器が多量に出土しているが、遺構を明確に確認することができなかった。

また、辰野東小学校の校舎改築に伴って調査が実施された半平蔵遺跡では、古墳時代の祭祀跡をはじめ、白玉を伴う住居址や、金環が出土している住居址等合わせて26基をこえる竪穴住居址が出土している。この地域は『延喜式』に記載されている御牧のひとつである「平井手牧」の推定地域であり、奈良時代から平安時代にかけての住居址が17基と、掘立柱建物址10基以上が出土している。また、付近に群集墳の中で唯一残された御陵ヶ塚古墳や、石室の一部が残存している御社宮司古墳が存在していることから、牧との関係を考えていかなくてはならない。

神送り遺跡は半平蔵遺跡の南に位置し、昭和48年に中央自動車道の建設に伴い調査が実施され、その後、県道改良事業等で本調査、試掘調査が行われている。その結果、平安時代の住居址が5基検出されており、これらの遺構からは灰釉陶器が出土していないことから、平安時代前期末頃の集落址であることが判明した。

この他、中央自動車道の建設に伴って調査された遺跡としては、以下の8遺跡がある。

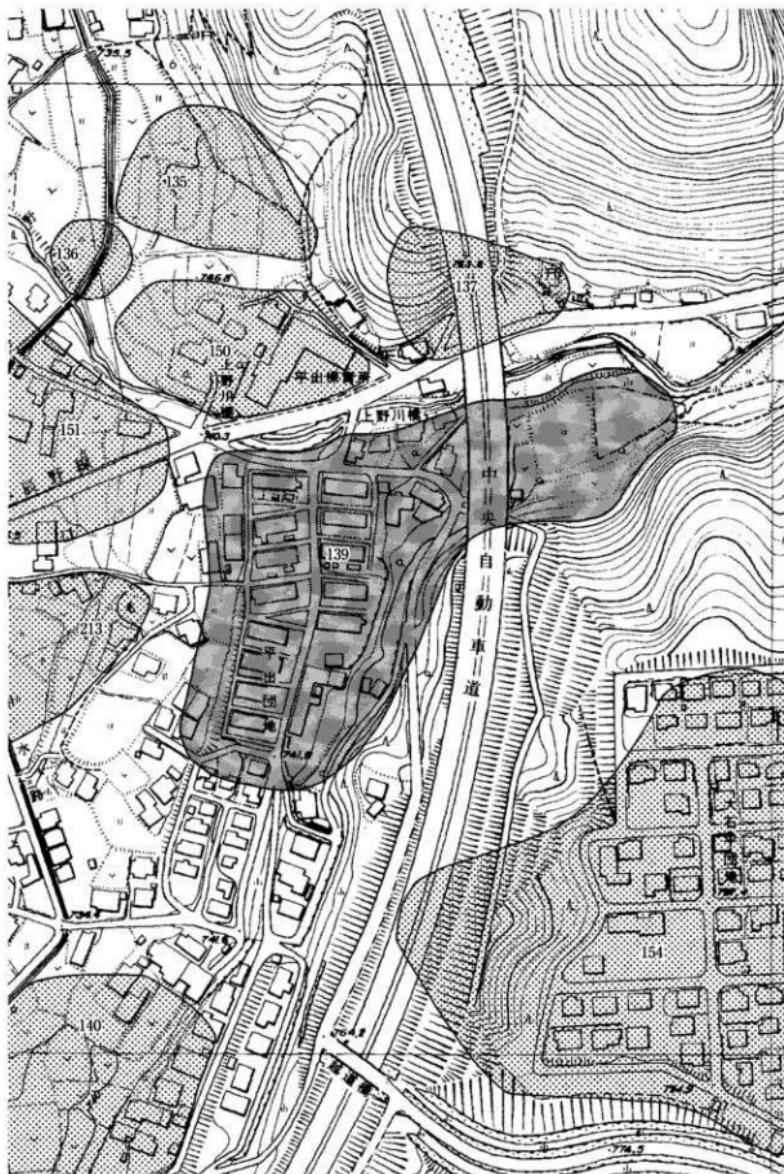
牧垣外遺跡は半平蔵遺跡の東部に位置し、平安時代の住居址1基が出土している。また縄文時代中期から後期の土器片も出土している。

堂ヶ入遺跡は上平出の「井出の清水」の南麓にあたり、この遺跡からは縄文時代前期末葉を中心とした遺物を出土した住居址2基と土坑8基が発見され、中世では蝶で埋められたり敷かれたりした墓壙内から、骨片をはじめ、角釘等が出土している墓地が31基出土した。

沢入口・沢頭・藤森遺跡は前沢川の上流の山麓に展開している。沢入口遺跡では住居址5基が出土しており、いずれも須恵器の出土がほとんどなく、土師器、灰釉陶器が中心であることから、平安時代中期から後期にかけての集落址と考えることができる。その他縄文時代後期と考えられる土器片も出土している。沢頭遺跡からは、平安時代の住居址が1基出土している。この住居址からは退化した土師器壺や、黒色土器碗が出土しており、終末期に近い時期と考えられる。藤の森遺跡でも1基の住居址が出土している。この住居址からも器高の浅くなった土師器や黒色土器、灰釉陶器が出土しており、沢頭遺跡と同様な時期と考えることができる。

平出上ノ原遺跡は、上記の3遺跡に続いて分布しており、調査の際、縄文時代中期の土器片が若干出土しているにすぎない。また、公家塚、大窪遺跡からも遺構は発見されていないものの、それぞれ縄文時代中期後葉、縄文時代中期から後期の土器片が出土している。

また、小城遺跡では、石塔の建設に際して埋葬と考えられる縄文時代中期後葉の土器が1点出土している。工事中の出土のため、詳細は不明であるが、口縁部を上にして埋められていたようである。このことからこの遺跡には縄文時代中期後葉の集落址の存在が推測される。



第2図 周辺道路分布図 (S=1/2,500)

第Ⅱ章 調査の経緯と経過

1. 保護協議の経過

越遺遺跡の存在している通称平出田地の建て替えについては平成15年頃からその計画があり、保護協議も数回行っており、同年12月10日付けで「土木工事のための埋蔵文化財の発掘の通知書」が提出されている。しかし、その計画が具体的になってきたのは平成18年度であった。

平成18年9月26日に行われた保護協議の席上で、平成19年度に建物を解体し、平成20年度に工事を着工するということであった。平成19年3月9日に実施された協議では、対象範囲の東半部を掘削し、西半部を盛土する計画となることが判明した。このため、町教育委員会では建物の解体に立ち会い、遺構に影響がないことを確認すると共に、遺跡の内容について情報を得るために動めた。その結果、水田の開田もしくは住宅の用地造成の際に北東部分については一部掘削が及んでいるものの、おおむね遺跡が残存している可能性が考えられた。

平成19年8月3日に再度保護協議を実施し、さらに詳細なデータを得るための試掘調査を実施することとし、対象地区に6本のトレーナーを開坑した。その結果、南半部については砂層や、水の滞留したと考えられるシルト層が検出されたため、河川の旧流路の存在が考えられた。このため、開発対象地域の北半分について発掘調査の対象とし、建物の建設及び造成によって破壊される地点について本調査を実施するよう協議を行ったが、この時点では実施設計及び、造成計画が明確でなく、調査地点を絞り込むことができなかった。しかし、計画が明確になるまで調査を待つと建設計画に支障が生じる恐れが出たため、遺跡の分布する範囲をすべて発掘調査することとし、11月5日より発掘調査を実施した。

その後、12月に入りて実施計画が明らかになり、調査範囲の一部が破壊を逃れることができたため、当該地点をそのまま埋め戻し、遺跡の保存をはかり、建物部分と道路建設予定地について調査を継続した。

2. 発掘調査の経過

9月20日(木)晴れ 第I調査区表土剥ぎ開始。	1月9日(水)晴れ 第Z・31・7・19・23・24・30号土坑測量。
9月25日(火)晴れ 第II調査区表土剥ぎ開始。	1月15日(火)晴れ 第I調査区土坑調査。
10月2日(火)曇 碾群検出作業。	1月21日(月)曇 第4号住居址調査。
10月9日(火)雨のち曇 碾群測量用写真撮影。	1月24日(木)曇のち晴れ 第II調査区掘り下げ。
10月10日(水)晴れ 碾群端点測量。	1月29日(火)雪 埋設土器2測量、写真撮影。
11月7日(水)晴れ 碾群2層測量用写真撮影。	2月1日(金)晴れ 第I調査区全体測量。
11月12日(月)晴れ 第I調査区第1号住居址掘り下げ。	2月7日(木)晴れ 集石5測量用写真撮影。
11月22日(木)晴れ 第1号住居址測量用写真撮影。	2月14日(木)晴れ 環状列石7測量用写真撮影。
11月29日(木)曇 第2号住居址調査。	2月15日(金)はれ 空中写真撮影。
12月4日(火)晴れのち曇 埋設土器1実測。	3月4日(火)はれ 第II調査区土坑調査。
12月6日(木)晴れ 第I調査区碾群測量用写真撮影。	3月13日(木)くもり 第109号土坑測量。
12月7日(金)曇 集石9測量用写真撮影。	3月21日(金)くもり 第II調査区土坑測量用写真撮影。
12月12日(水)晴れのち曇 集石3測量用写真撮影。	3月25日(火)はれ 第5号住居址調査。
12月20日(木)晴れ 空中写真撮影。	4月2日(水)はれ 空中写真撮影。撤収作業。

第Ⅲ章 発掘調査

1. 調査の方法

越遺遺跡は、試掘調査時には自然礫が多く散乱し、遺構の検出がさほどなかったため、比較的密度の薄い遺路と判断した。このため、調査期間も含め短期間との予想のもと本調査を実施したが、調査が進むにつれてその密度の濃さに調査期間及び経費の増大が予想されるようになった。

特に第2調査区では建物の基礎かと考えられる年代を明確にできない遺構をはじめ、配石遺構、環状列石状遺構等が自然礫の流入の中に認められ、発掘調査の重点が、その測量をいかに効率よく行うかに終始したと言っても過言ではない。

試掘調査は、建物の解体が行われた後に、地盤の安定していると考えられる部分を選定し、2m幅で6本開坑した。その結果を基に、本調査を実施する地点を決定し、バックホーによって造成時の盛土及び、水田の耕作土とその基盤を除去し、礫が出土した高さからは人力によってジョレン等を使用して遺構の検出に努めた。なかでも第2調査区では多量の礫が出土し、検出作業に多くの時間を費やしてしまう結果となってしまった。

礫が検出された段階で景観写真を撮影し、遺構検出面から上層にある礫をすべて除去後、産業用ラジコンヘリコプターによる空中写真を撮影し、測量用の写真も同時に撮影した。

その後、一部を埋め戻しながら、遺構と考えられる地点を写真実測に委託し、平行して現地ではレベルの取り込み及び断面図の作成を行った後、再度バックホーにより遺構の検出できる高さまで掘り下げた。

遺構の検出は移植ゴテ等で実施し、遺構内の掘り下げも移植ゴテ等を用い、土層観察畦や、遺構を半剖するなどして断面図の測量にとづいた。しかし地山の状態が不安定であり、プランの把握が正確にできず、土層を観察することを断念した遺構も存在する。

遺構の掘り上げた時点で、1/20の縮尺を基本にして遺構平面図を作成し、産業用ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。

なお、礫に関係した遺構を中心に、時間の短縮をはかる目的で写真測量を最大限活用し、比較的小規模な出土状況図の作成や、遺構の測量については、トータルステーションによる変化点の取り込み、及び打ち出しを用いての現地で結線作業を実施し、一部任意点を使用した簡易造り測量を行ったものもある。また、現場での対応が困難となった遺構については、オルソ写真による製図を行っている。

なお、調査区の設定は、国土交通省国土地理院の測量法による世界測地系・平面直角座標系第Ⅷ系を基点とし、基準メッシュ図の区画については国土基本図（1:50,000大縮尺地形図）の区画に準じた。基準標高については、業者によってGPS測量機を使用してあらかじめ設置された基準点に落とされたベンチマーク（T-1:744.370m）を使用した。

遺物の取り上げは、遺構検出作業にはトータルステーションで出土地点を記録しながら取り上げ、遺物整理段階でグリッド番号を付した。遺構内の遺物については各遺構別に取り上げた。また必要に応じて、出土状況図を1/10の縮尺で作成し、出土位置や出土レベルを記録し、写真撮影を行ったものもある。

遺物の整理段階で遺物台帳を作成し、各遺物には出土遺跡名（略称：KED）と遺物番号、遺構名等を註記した。現場での写真撮影は一眼レフカメラを2台使用し、モノクロームネガフィルムと、カラーポジフィルムを用いた。また、出土遺物の撮影にはデジタル一眼レフを使用した。

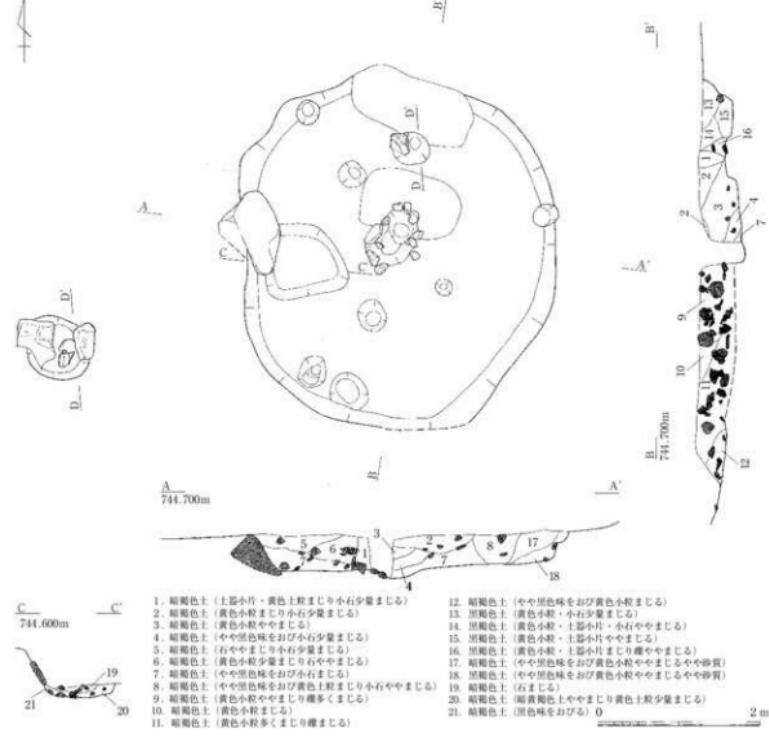
第IV章 遺構と遺物

1. 住居址

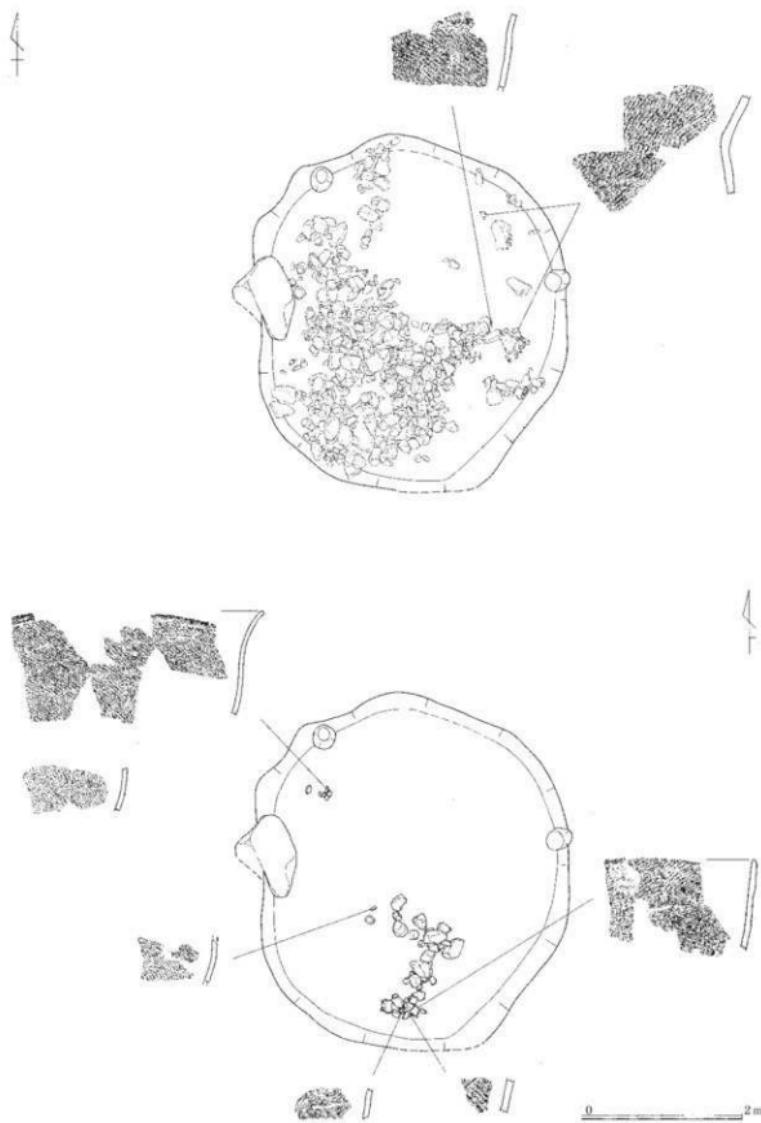
(1) 縄文時代

第1号住居址（第3・4図）

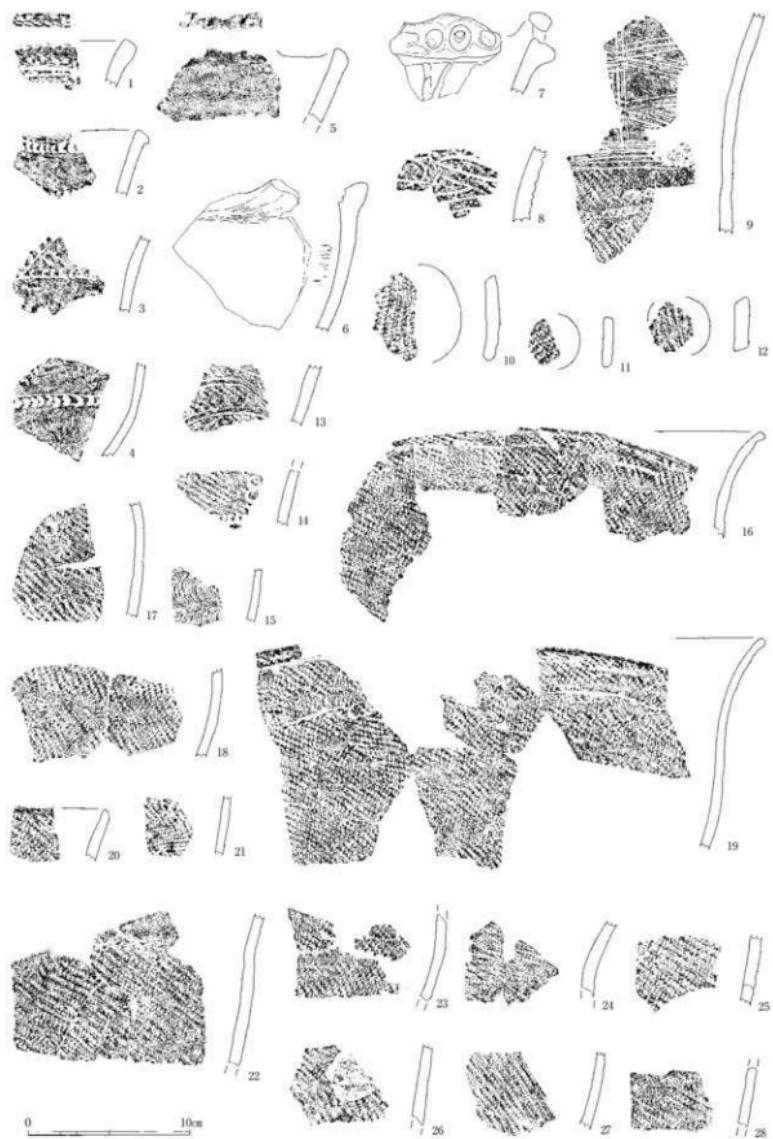
この住居址は第1調査区から出土している。長径4.5m、短径3.8mの平面橢円形のプランであり、深さは約40cmを測る。調査中に住居址北部には覆土中に礫が混入せず、床面調査中に土坑が確認された。このことから重複した土坑の存在が推定できるが、覆土が暗褐色系の土であった事もあり、これらの遺構については十分な調査を行うことができなかった。なお、礫は覆土中の南部分を中心に多量に含まれており、床面直上までおよんでいた。



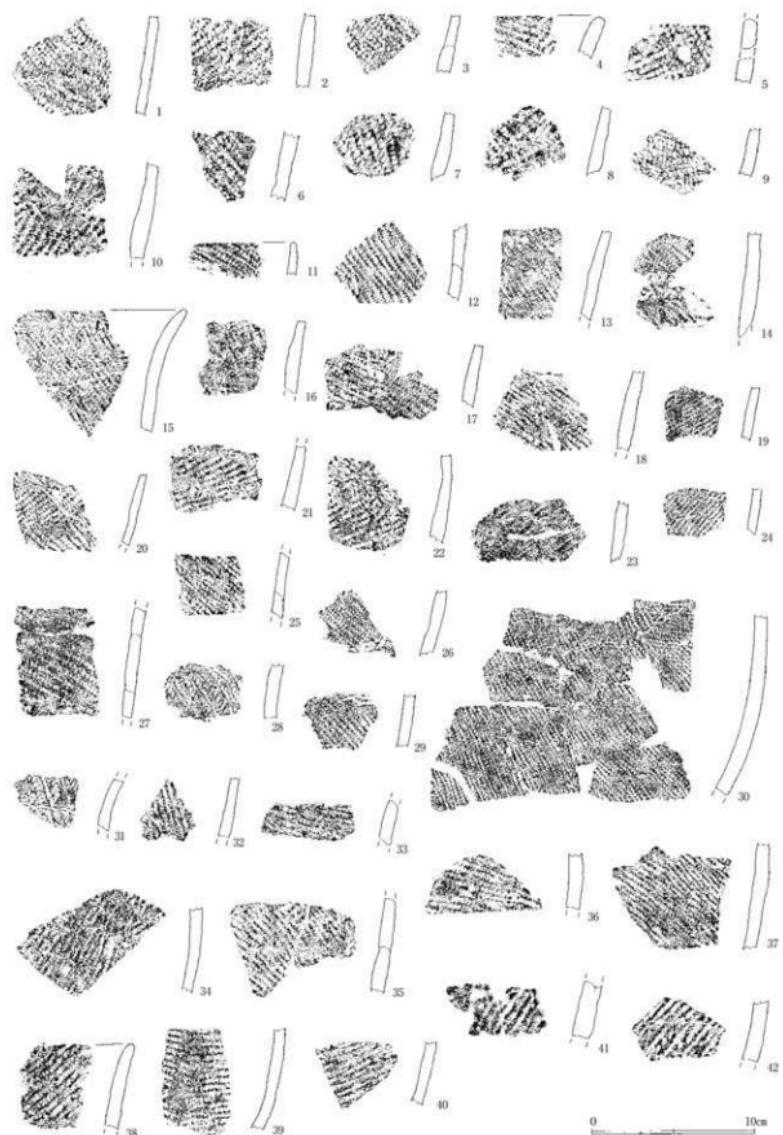
第3図 第1号住居址実測図(1)



第4図 第1号住居址実測図(2)



第5図 第1号住居址出土遺物(1)



第6図 第1号住居址出土遺物(2)

また、礫が多量に混入した地山を掘削していたため、床面は平坦でなく、礫の露出が激しかった。さらに壁面には、大型の礫が移動できずに住居址内に取り込むような形で残されていた。なお、覆土と近い色調の土が、床面である程度締まった状態で検出されていることから、貼床ほどではないものの、住居址の掘削後、ある程度整地して平坦面を作り出していたものと推察される。

柱穴は8箇所検出されているが浅い。また、P 1の覆土中からは土器片（第5図18-19）が出土した。

なお、住居址中央付近に落ち込みは確認できたものの、焼土が検出されないため、炉は確認されていない。
遺物（第5～7図）

土器は、縦文を施した破片を中心に出土している。更に、縦位に竹管状工具による刺突と、横位の爪形文を施した土器（第5図15）や、半截竹管状工具によって平行沈線が引かれている破片（第5図13）も出土している。第5図21、第6図20は羽状縦文であり、第5図10～12は土製円盤である。石器は紗岩製の横刃型石斧や、黒曜石製の石匙・石鎌の未製品が出土している。なお、第5図6・7は時期が異なる可能性がある。

この住居址から出土している爪形文が施された土器片や、半截竹管状工具を使用して対角線状に引かれた沈



第7図 第1号住居址出土遺物(3) (12・13:S=2/3)

縞文様（第5図9）、入組木葉文（第5図8）の破片等から、諸磯a式段階と考えられる。

なお、第2号住居址から出土した破片との接合例（第5図18）も確認されている。

第2号住居址（第9図）

第1調査区から出土した。試掘調査時に検出された遺構で、遺物が覆土上層～中層を中心に疊を伴いながら出土している。平面プランは長径4.4m、短径4mの楕円形であり、深さは約50cmであった。覆土は暗褐色系の土で占められ、疊が多く混入していた。この住居址も第1号住居址と同様、地山の疊が床面に露出しており、凹凸が激しい。しかし、床面の調査段階では平坦に整地した痕跡を確認することはできなかった。

また、壁面には大型の疊が2箇所に存在し、プラン全体の形状を大きく歪めている。このような状況であったため、床面での施設の検出が難しく、炉及び、柱穴を確認することができなかった。

なお、この住居址も土坑が重複しているものの、前後関係を把握することができなかった。

遺 物（第10~12図）

覆土上層から、中層を中心にして多くの土器片が出土している。これらの土器片は第1号住居址と同様に、縞文施文を基本として、入組木葉文（第10図1~11）、肋骨文を施文した土器（第10図13~19）をはじめ、口縁部に横位の爪形文を2条施文している破片（第11図1~6）、縦位に竹管状工具による刺突を加えた土器（第11図9~12）等が出土している。なお、第10図15に施された刺突は、竹管状工具による施文とは異なっている。また、薄手の器壁で、焼成の良好な羽状縞文を施した土器片（第11図31~34）や、外面に赤色塗装が施されている土器片（第12図31）も出土している。遺物のうち第10図13・14は、第4号住居址からの出土であるが、16と同一個体のため、ここに掲載した。

混入はみられるものの、これらの土器から、この住居址は、諸磯a式段階と考えられる。

第4号住居址（第13・17図）

第1調査区から出土した。今回の調査区域の中では一番安定した地山地点での出土ではあったが、道路による掘削と、電信柱が立てられていたため、調査範囲が限定され、遺構の1/2程度を調査できたにすぎない。

この住居址は推定ではあるが、約4.4mの平面円形のプランで、深さは約50cmを測る。遺構検出面から覆土中に多くの疊が内在し、土層の記録も詳細に行なうことができなかった。

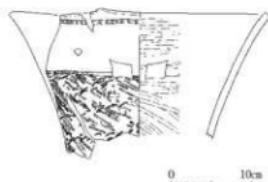
この住居址もほかの住居址と同様に壁面に大型の疊が入り込んでおり、住居址内側に張り出している。

床面には極浅いビットが6箇所検出できたが、主柱穴といえるような深いものは検出できなかった。また形態の安定しない土坑が2基出土している。なお、床面は軟らかく、硬化面は確認できなかった。

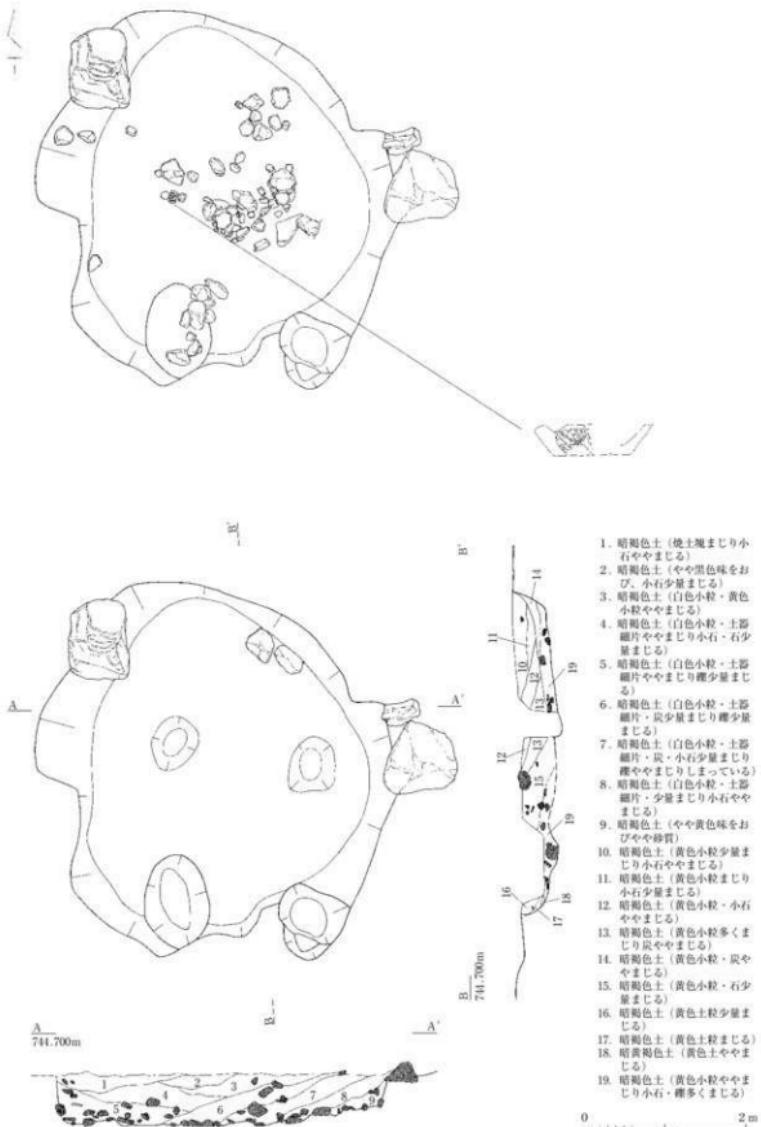
また、覆土上層に焼土が出土し、その周辺部から後期の土器が集中して出土し、縞文時代後期の何らかの施設があった可能性高いが、黒色系の土層内の出土のため、プランを明確にすることはできなかった。

遺 物（第14~17図）

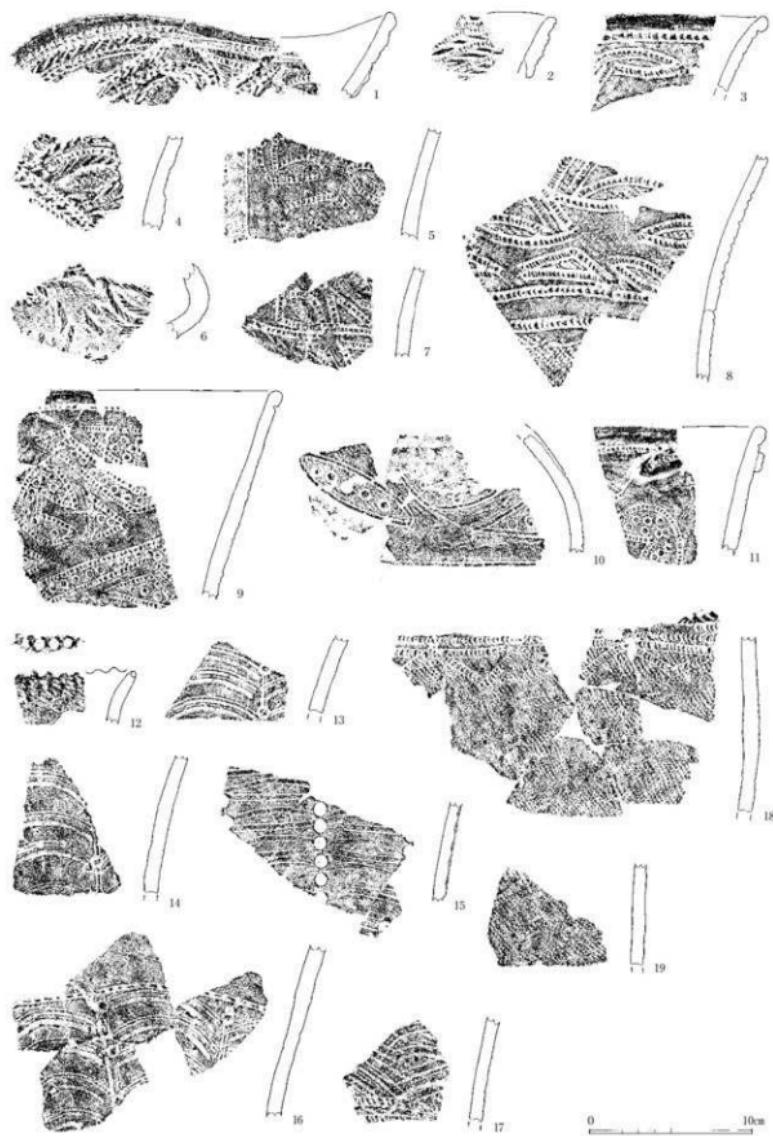
肋骨文を施文した土器片（第14図1~4）をはじめ、その形態が崩れた文様（第14図5~7）、櫛歯状工具による連続した短線文や沈線が施された土器（第14図8~11）、爪形文を施した土器（第14図22~25・29~36・38~39、第15図1~11）等が出土した。また、上面からは偏平な疊を使用した石皿が出土した。



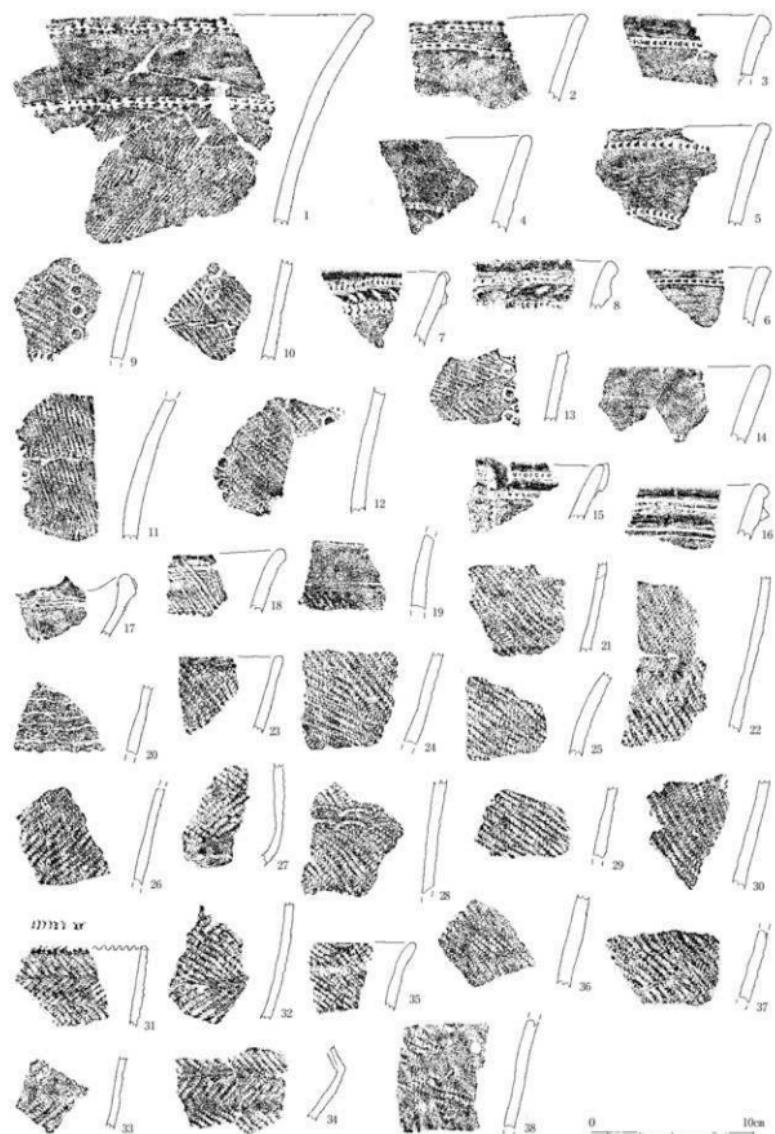
第8図 第4号住居址出土遺物(1)



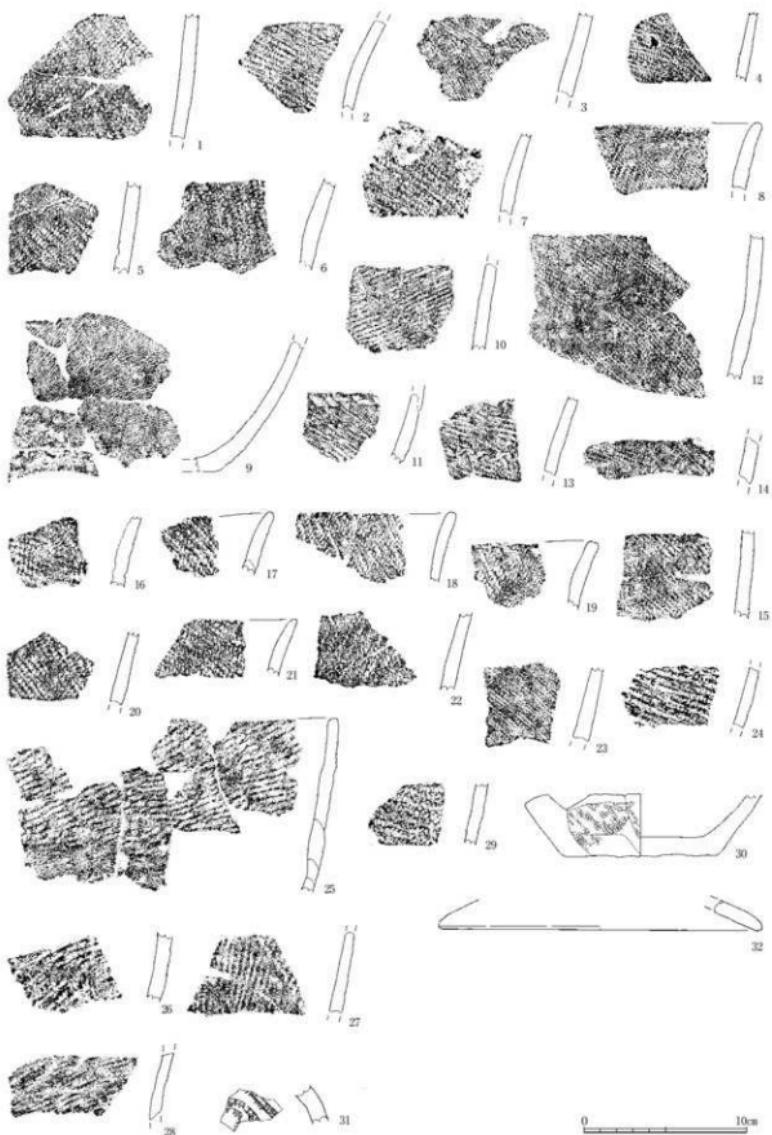
第9図 第2号住居址実測図



第10図 第2号住居址出土遺物 (1)

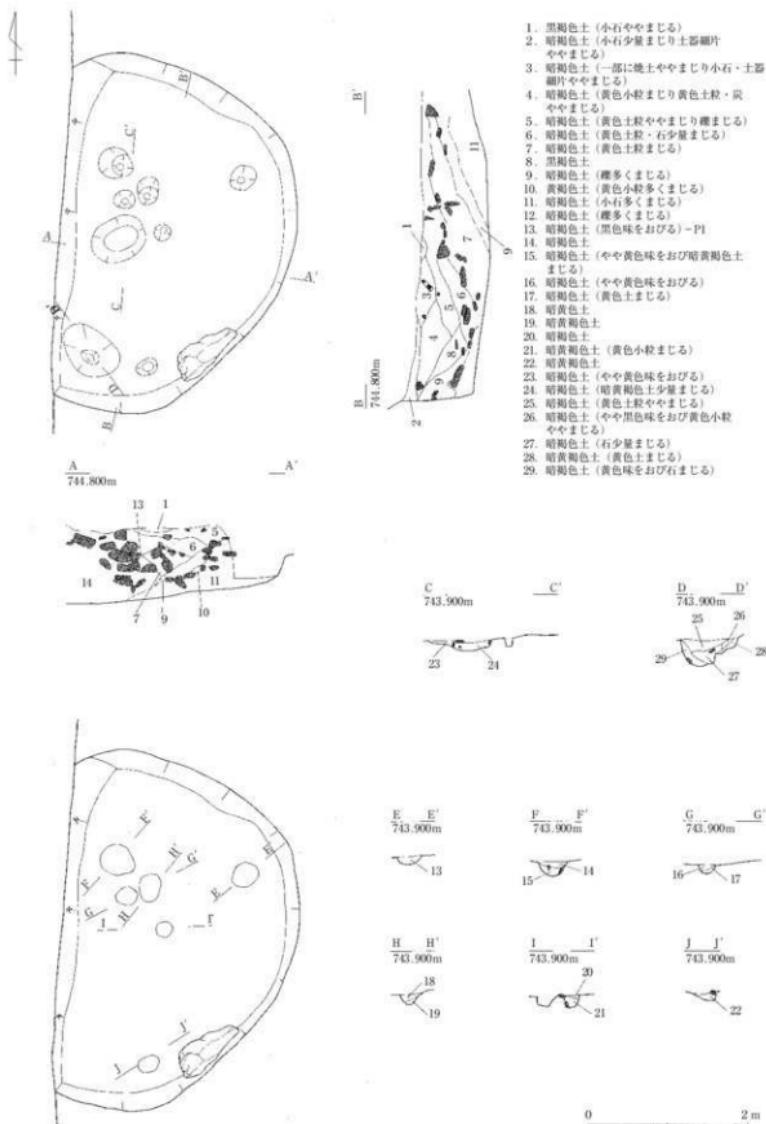


第11図 第2号住居址出土遺物(2)

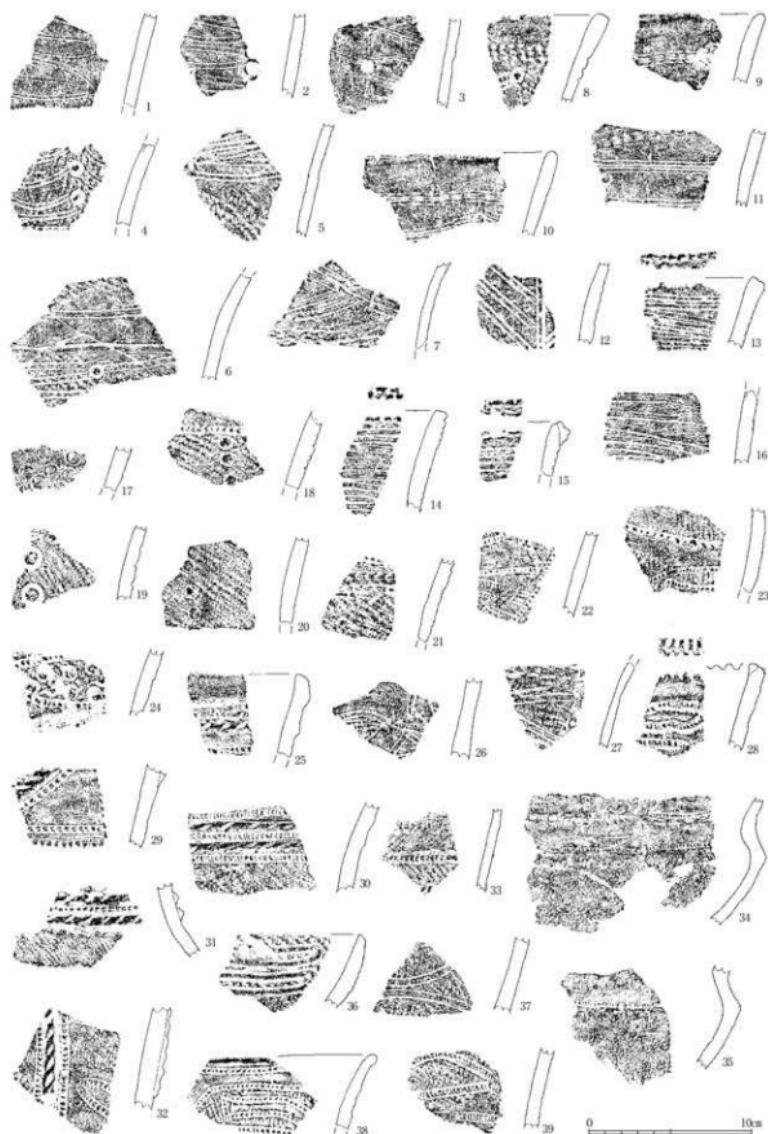


第12図 第2号住居址出土遺物(3)

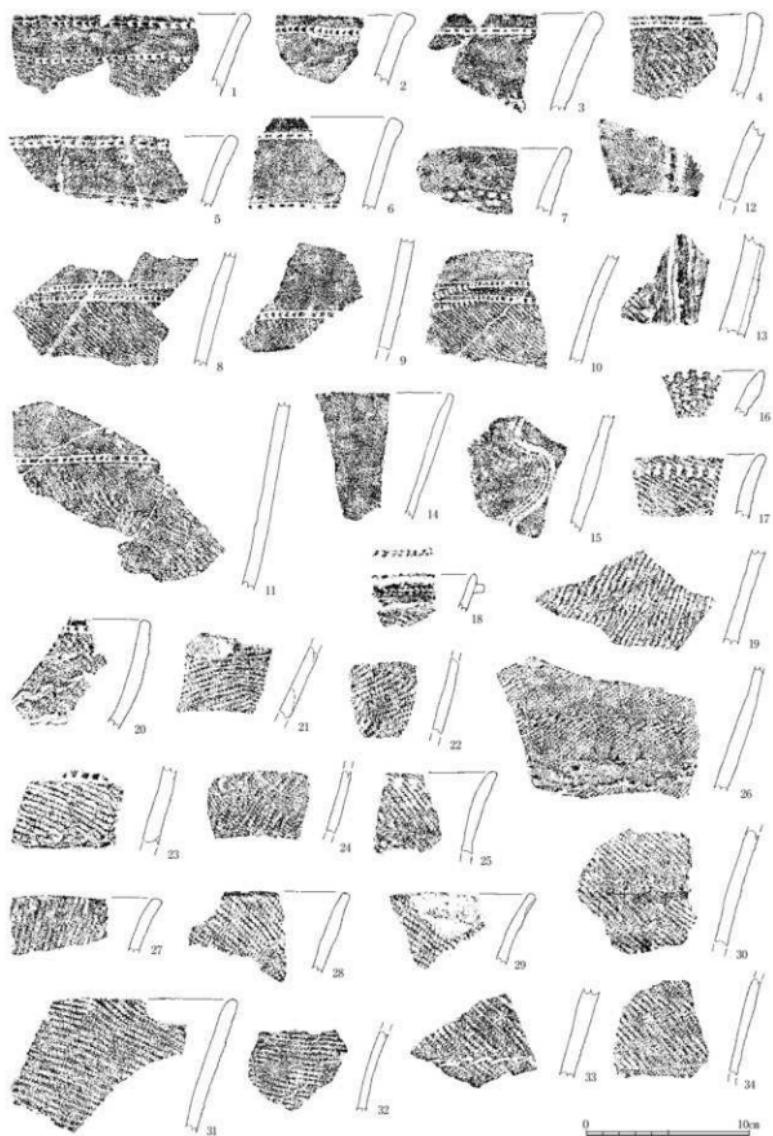
1. 住居址



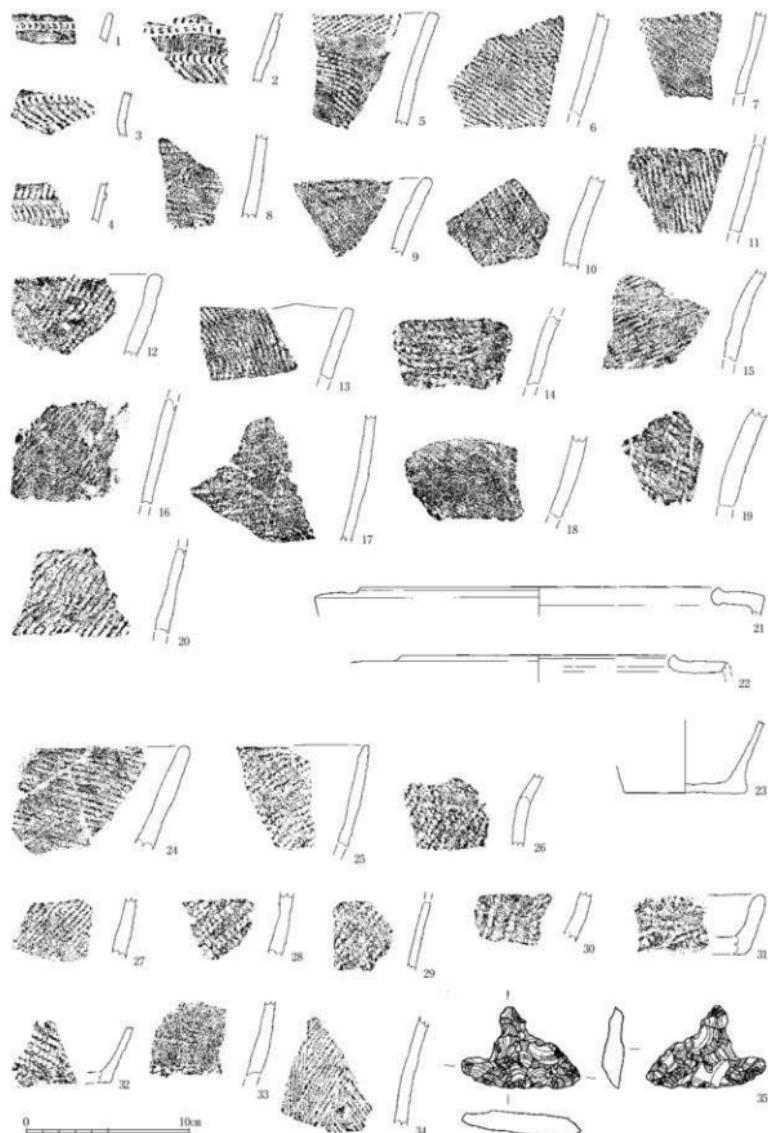
第13図 第4号住居址実測図



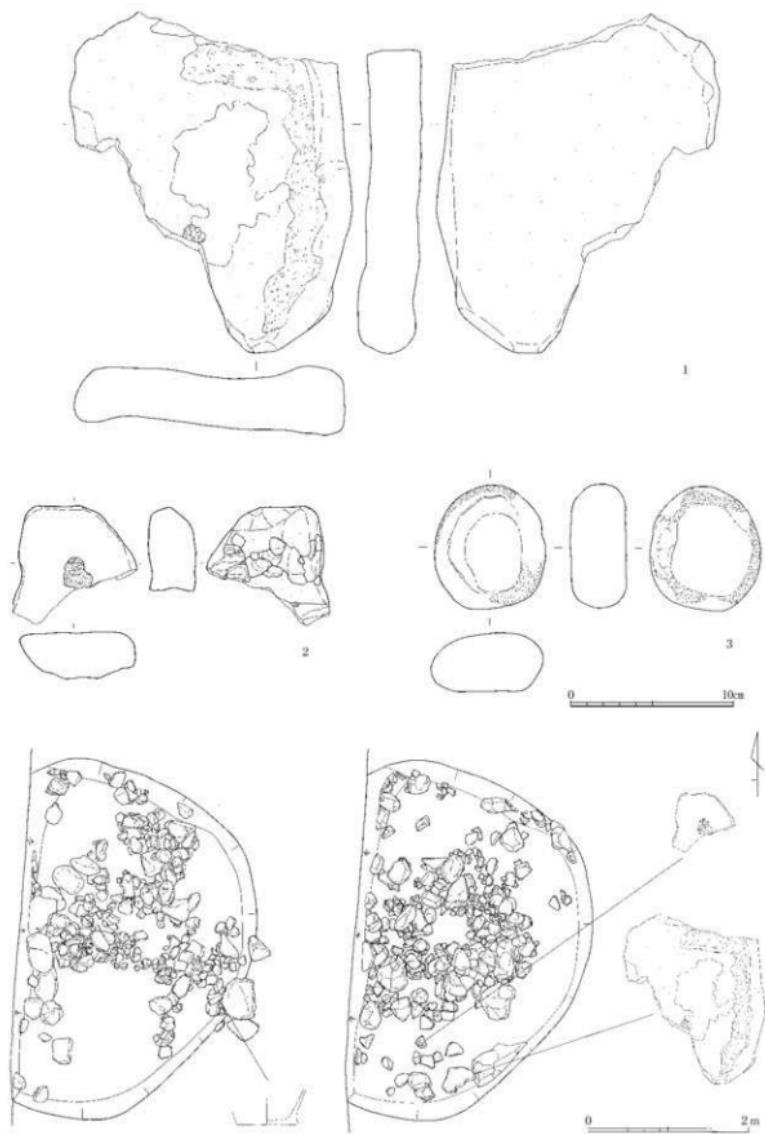
第14図 第4号住居址出土遺物(2)



第15図 第4号住居址出土遺物(3)



第16図 第4号・第5号住居址出土遺物（1~23：4住 24~35：5住）(35:S=2/3)



第17図 第4号・第5号住居址出土遺物および第4号住居址実測図（1・2：4住 3：5住）（1:S=1/6）

第5号住居址（第18図）

第II調査区から出土した。上層の配石址3の中心部を除去後遺構検出して発見したが、残存壁高は約5cmしかなく、遺存状況はよくなかった。また、東半部は今回の工事での破壊を逃れたため、埋め土保存されている。

調査された範囲での住居址のプランは直径約3.8mの隅丸方形と考えられる。住居址南部については、自然礫が多数出土し、プランの把握が困難であったため、壁を明確に検出することができなかった。

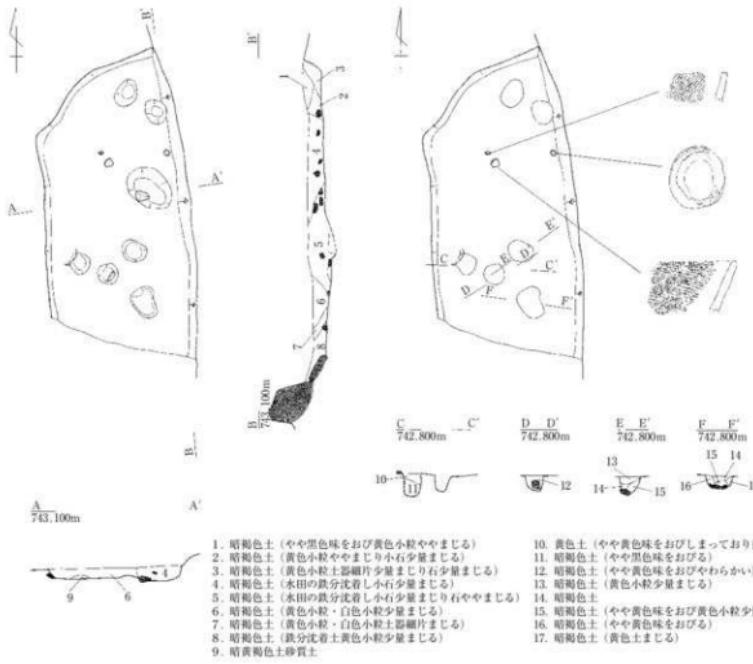
覆土は暗褐色系の土で占められ、水田耕作の影響による鉄分の染み込みも確認された。また、床面に硬化部分は認められず、軟らかかった。ピットは不規則に6箇所から検出され、いずれも30cm程の深さであった。

また住居址中央部付近には5cm程度の浅い土坑が出土し、覆土中層の一部に焼土が検出された。

なお、床面からは土器小片と、磨石が出土した。これらの小片から、この住居址は縄文時代前期と考えることができる。

遺 物（第16・17図）

遺存状況が影響してか、出土量は少ない。土器片は主として縄文を施文している。第16図34は半裁竹管状工具を使用しての平行沈線文がみられ、時期的に下る可能性がある。また床面からは小片をはじめ、磨石（第17図3）も出土した。



第18図 第5号住居址実測図

2. 埋設土器

第1号埋設土器（第20図）

第2号住居址の西側から遺構検出中に出土した。直上層は水田の基盤層であったことから、上部は破壊されたと推測できる。掘方は土器より若干大きめで、北部では自然縫が露出している。また土器内には縫が入っていた。

遺物（第19図2）

体部下半部が出土した。内外面共にナデ調整がみられる。

第2号埋設土器（第20図）

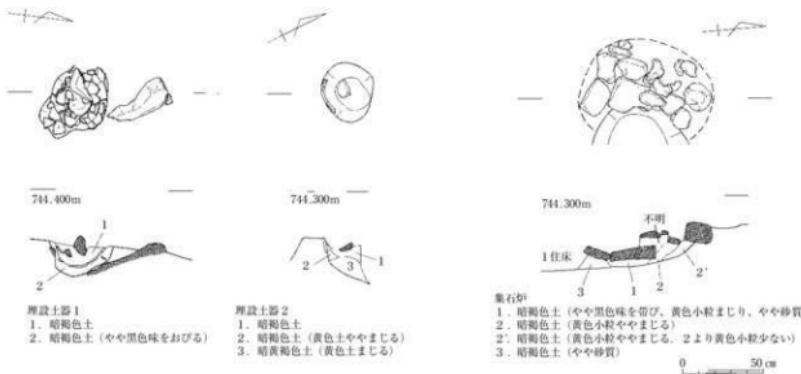
第2号住居址の南部壁際に出土している。土器は破片であり、掘方に貼りつくようにして出土した。なお、覆土中からは第1号埋設土器同様、縫が出土している。

遺物（第19図1）

口縁部の一部である。縄文を地文とし、上端部に爪形文が施されている。

3. 集石炉

第1号住居址北部で出土した（第20図）。当初は覆土中の縫と判断していたが、偏平な縫が敷かれるようにして集中していたため、その存在を把握した。なお、東部は第2号土坑の掘削時に破壊されている。直径約80cmの円形プランと推測できる。



第20図 埋設土器・第1号集石炉実測図

4. 土 坑

今回は131基の土坑が出土した。これらにはさまざまな形態が含まれ、中には柱穴としたほうが適当なものも含まれるが、あえて現場での番号で報告する。

また、土坑すべてを報告することが紙面の関係で難しいため、代表的な遺構を報告することとする。

第2号土坑（第22・35図）

第1調査区の第1号住居址北部に出土している。長径1.4m、短径0.8mで、深さは約5cmである。上層は水田の基盤層であり、開田の際の掘削によって大きく削られてしまったことが考えられる。遺物は破片が1片出土している。なお、同規模な土坑である第11号土坑及び第12号土坑とは南北方向に並ぶような分布をしていた。

遺 物（第41図1）

縄文が施された土器片が出土している。

第9・10号土坑（第27・28・35図）

これらの土坑は遺構検出時に黒色部が出土したため、サブレンチを開坑してその存在を確認した。この付近は地山が砂礫層であり、遺構のプランを明確につかむことができず、正確な形態を把握できていない。なお、第10号土坑の覆土中層からは焼土が検出され、その周辺には炭化物も見つかっていることから、この深さが本来の遺構底面の可能性も多い。また、第9号土坑に関しては、いわゆるロームマウンドの可能性がある。

遺 物（第41図11～13）

縄文時代後期と考えられる土器片が出土している。

第26号土坑（第25・26・36図）

第4号住居址の南部から出土している。直径約0.9m、深さ約50cmの平面プラン円形の土坑である。遺構覆土中層から下層にかけて礫が出土しており、特に下層では磨石をはじめとした円礫が出土している。

遺 物（第42図1～8）

縄文時代後期と考えられる土器片が出土している。

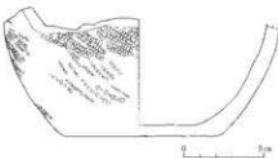
第2号住居址南部土坑群（第25図）

この地区では遺構検出時に礫がまとめて出土しており、それらを記録後除去して検出された。直径約0.5mの円形を呈した土坑約15基が重複して出土した。前後関係は、重複が激しく充分に把握することができなかった。これらの土坑の覆土中に礫はほとんど出土せず、遺物の出土も少量であった。

また、上層の礫の出土状況との関係をみると、礫の検出されない地点に土坑が検出されており、これら礫との関係も今後検討していくなくてはならない。

第72・73号土坑（第29・38図）

II区南部から出土している。当初は2基の土坑が重複していると



第21図 第72・73号土坑出土遺物

判断したが、長径約1.4m、短径約1.2mの椭円形の土坑であることが判明した。覆土中層からは礫が出土し、底部付近からは土器の底部（第21図）が出土した。

遺 物（第21図）

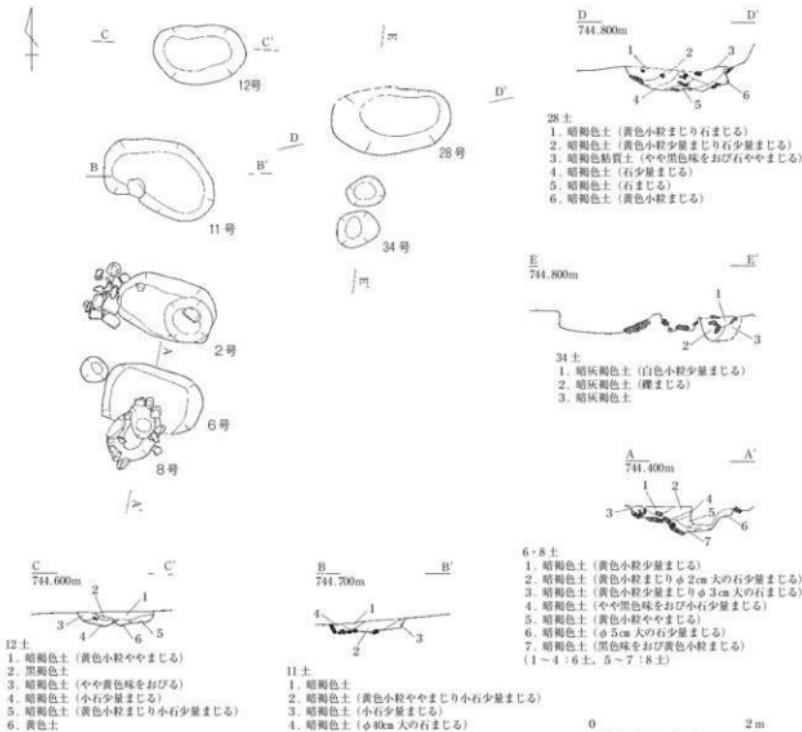
土坑南部底面から出土した。底部付近の縄文は磨滅し、明瞭ではない。

第88号土坑（第33・34・39図）

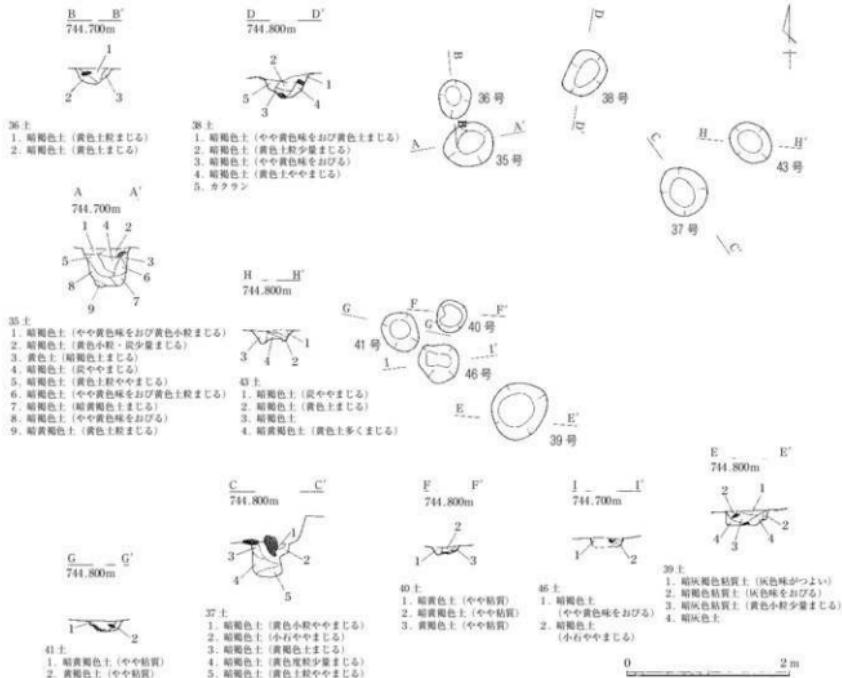
第II調査区の北部から出土した。遺構検出面に、礫がまとまりをもって出土したため土坑の存在を把握できた。長径約1.6m、短径約0.8mの平面椭円形プランで深さ約65cmである。覆土中層から自然礫が多く出土し、除去後、底面を精査したところ、西部から磨石が出土した。

遺 物（第43図10・11、第45図7）

第43図10・11は覆土中から出土した土器片である。縄文時代前期後半と考えられる。第45図7は底面から出土した磨石である。欠損部分はなく、上下面には磨痕、側面には敲打痕がみられる。



第22図 土坑実測図(1)



第23図 土坑実測図(2)

第95号土坑(第31・32・39図)

第II調査区の中部から出土している。遺構検出時から自然縛が検出され、土坑覆土内からも大量の縛が出士した。しかし、地山にも縛が混入しており、大型の縛が壁の一部を構成していたためにプランを正確に把握できず、不整形な形態となってしまった。なお、この土坑からは、注口土器の注口部等の破片が出土している。

遺物(第43図25~28)

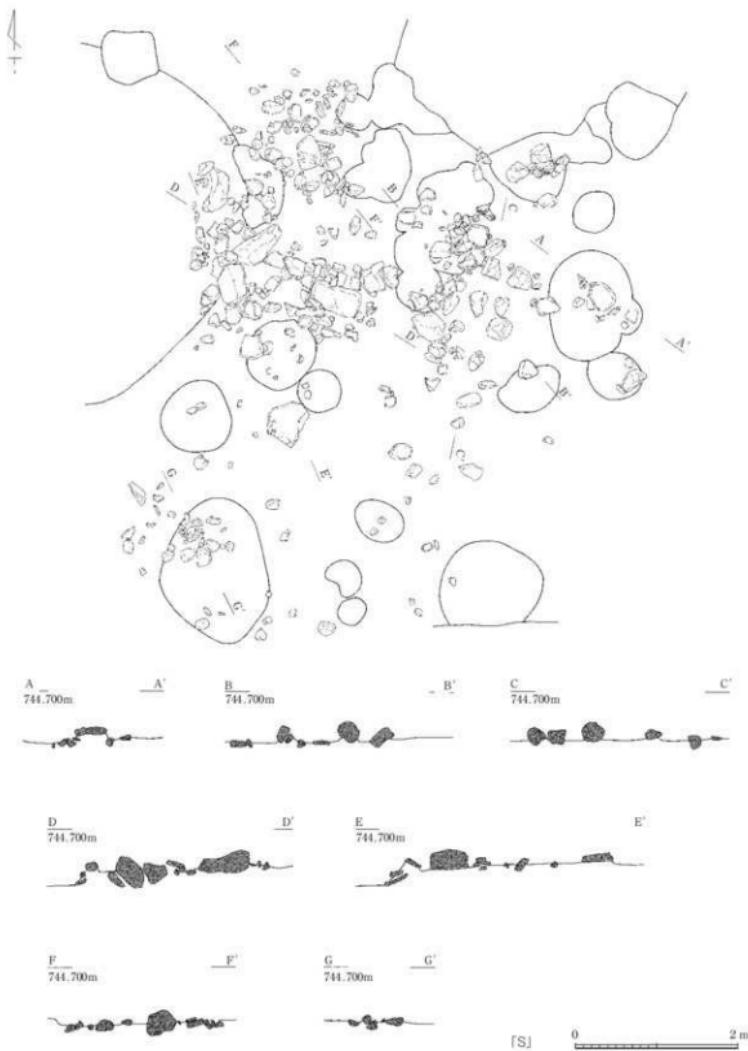
25~26は縄文時代前期の土器片である。28は土製円盤、27は注口部である。すべて覆土中からの出土である。

第109号土坑(第29・40図)

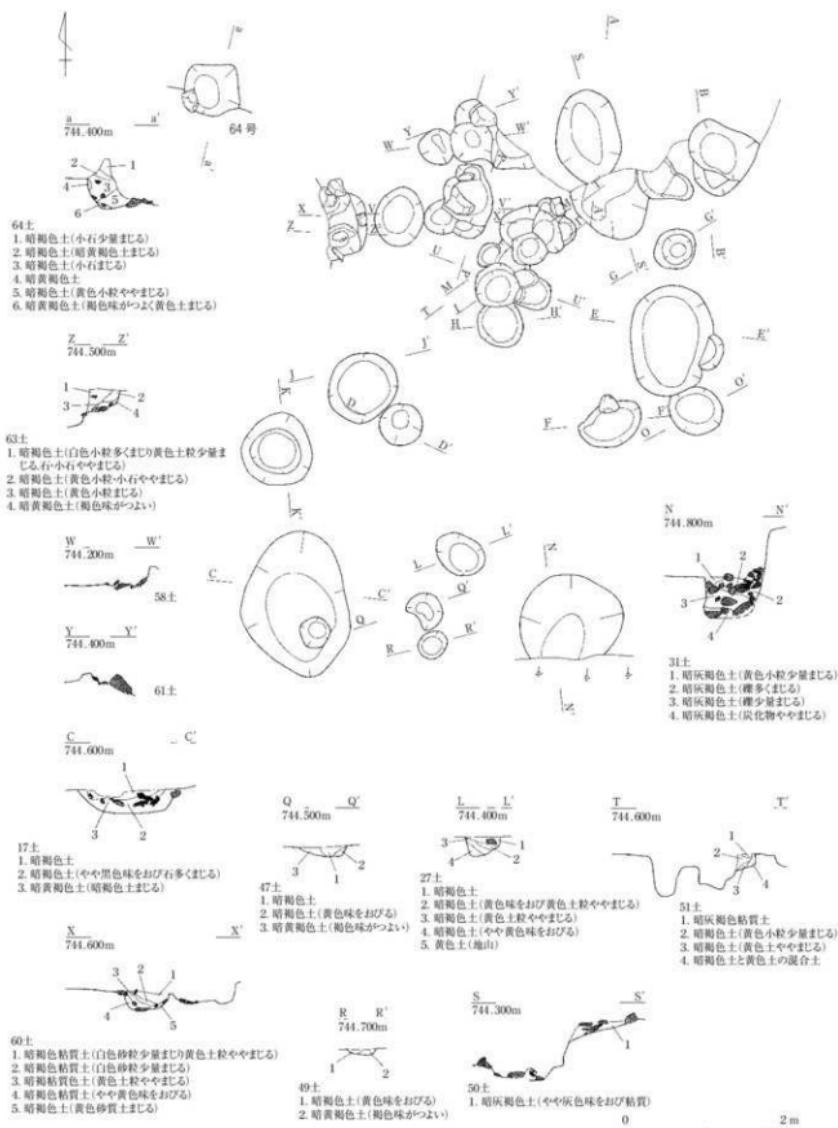
この土坑は第5号住居址南部から土器を伴って出土した。約1.3m×1mの楕円形として調査したが、プランは第5号住居址と同様に残存状況が悪く、正確な形態を把握できなかった。土器は、西部のテラス状になつた部分の底面から、土坑底部に出土した大型の縛上に敷くように並べられて出土した。

遺物(第45図4)

底部と体部の一部が口縁部から底部にかけて欠損し、完全な器形に復原することはできなかった。器面全体に縄文を施した後、口縁部にはキザミの入った隆帯によって文様を施している。また、口唇部にもキザミを伴う隆帯が施されている。

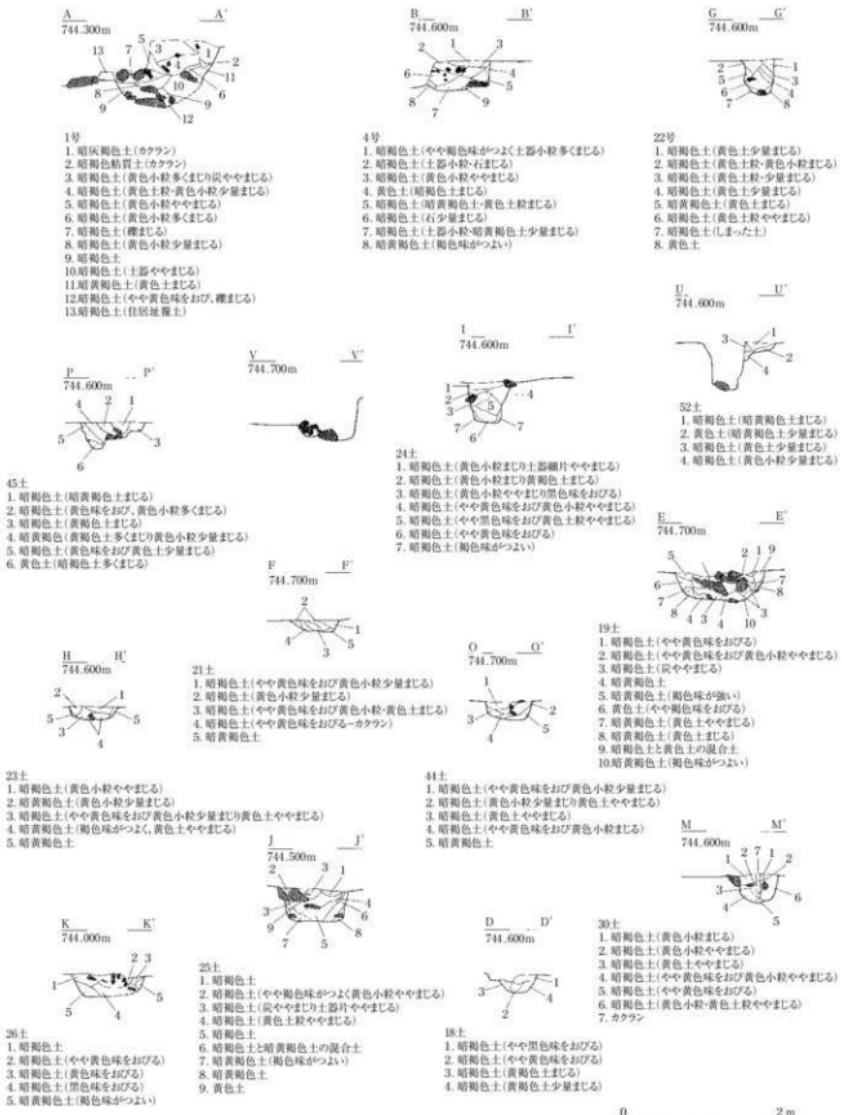


第24図 土坑上層出土確認測図

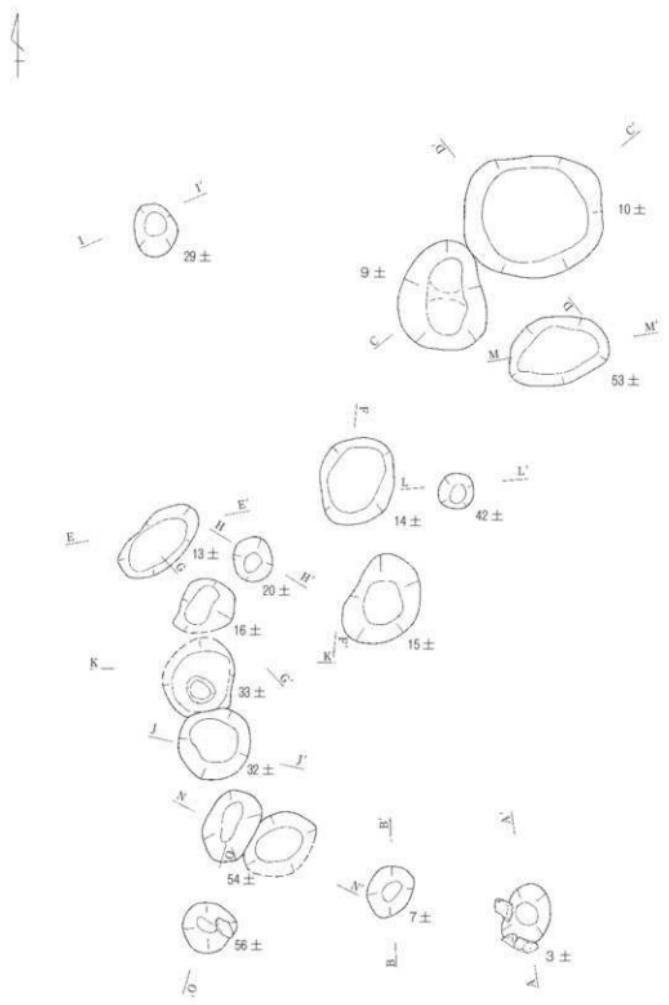


第25図 土坑実測図(3)

4. 土 坑



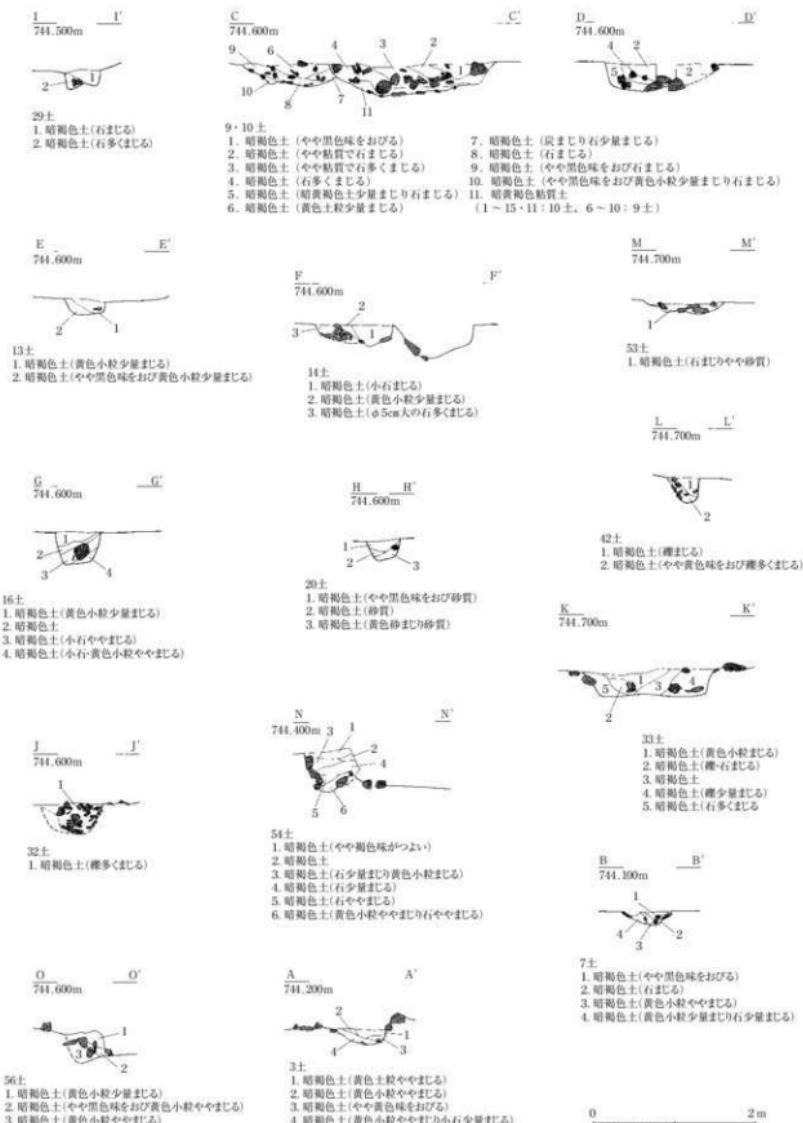
第26図 土坑実測図(4)



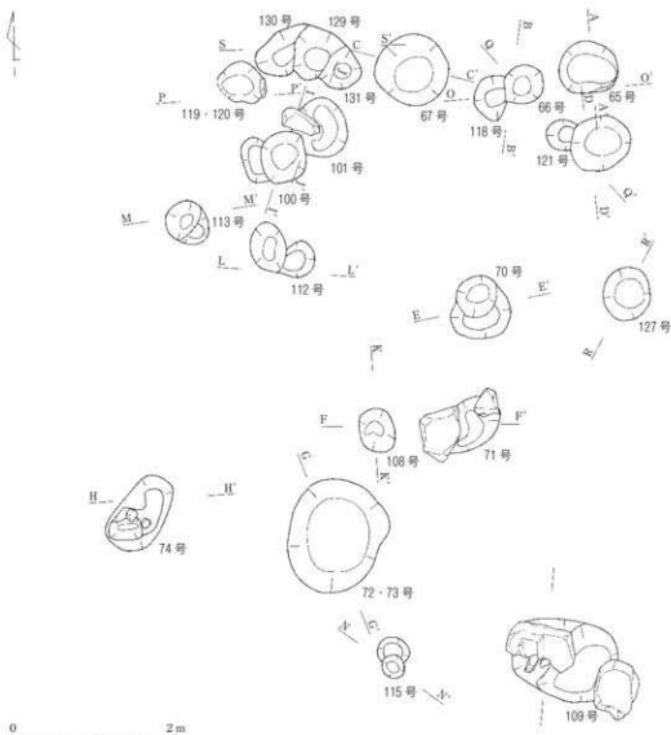
0 2 m

第27図 土坑実測図(5)

4. 土 坑



第28図 土坑実測図(6)



第29図 土坑実測図(7)

第114号土坑（第31・32・40図）

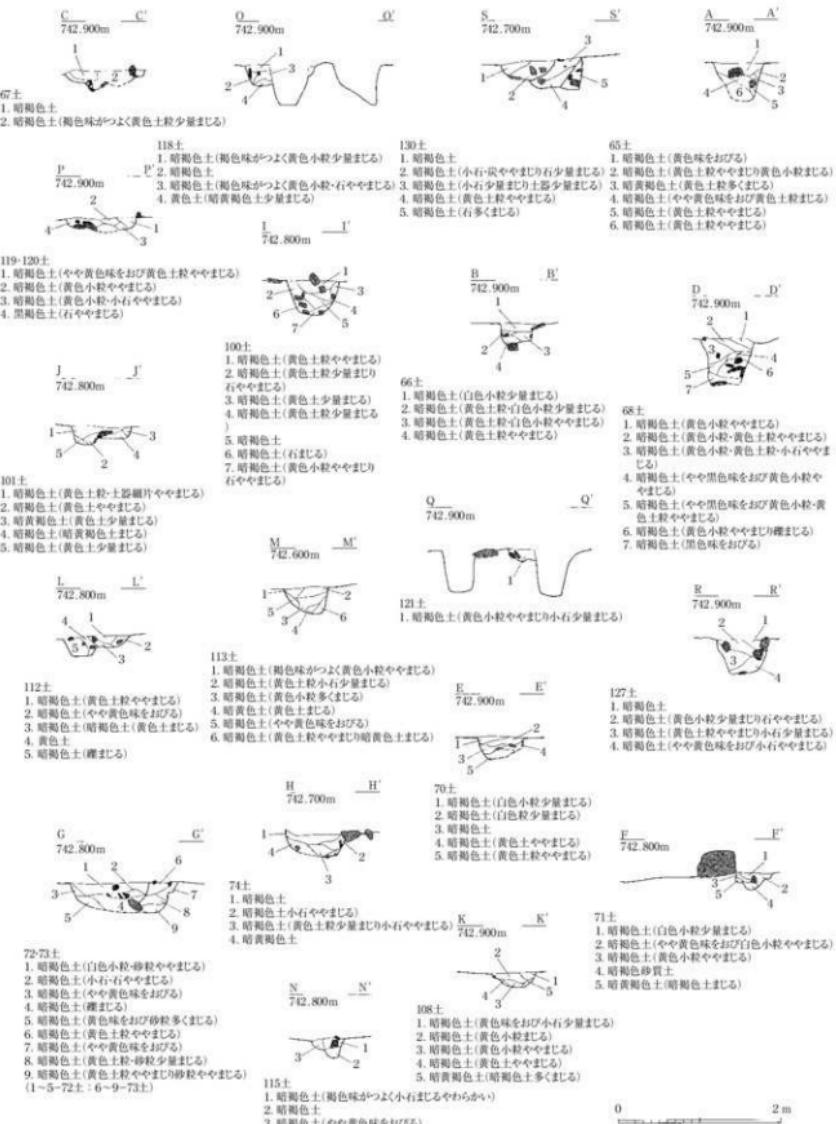
この土坑は第II調査区から検出された。長径約1.1m、短径約1mの楕円形で北東部にテラス状の平坦面がある。この土坑内からは縄が多数検出されているが、その中に欠損品ではあるが、磨石が1点出土した。

第122~125号土坑（第33・34図）

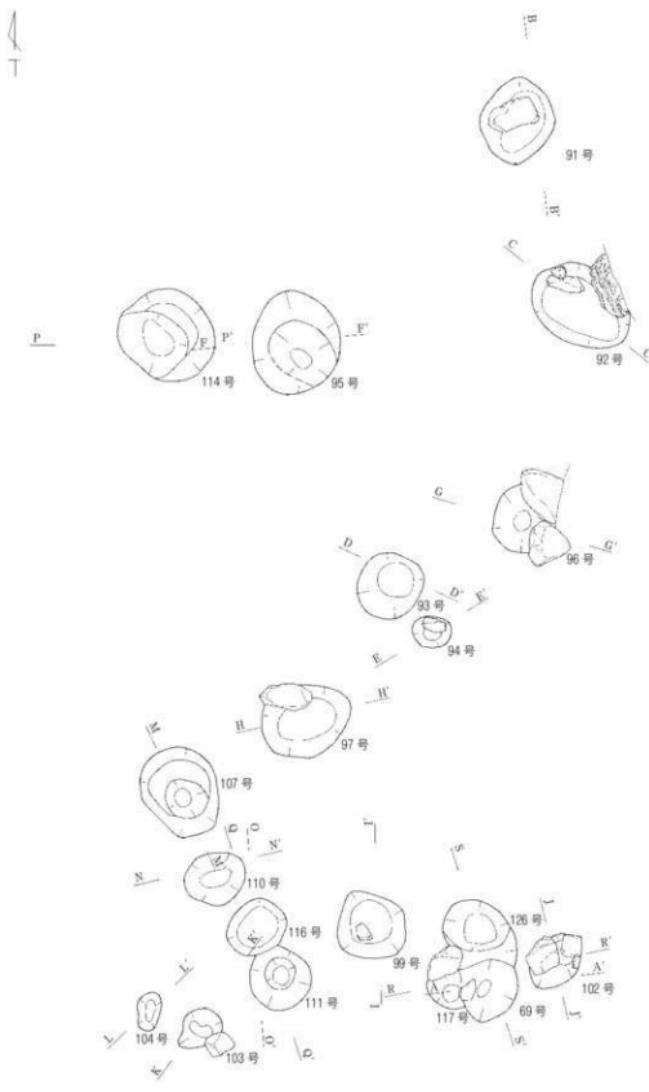
これらの土坑は、第89-105-106-128号土坑と隣接して、第II調査区の北部に出土している。第122~124号土坑は長径約0.8m、短径約0.6m程度の楕円形プランで、東西方向に主軸を向いている。また第125号土坑の底面には直径3cm程度の石が敷きつめられていた。

遺 物（第44図）

これらの土坑からは少量の土器片が出土したにすぎない。第122号土坑（第44図34）および第123号土坑（第44図35・36）からは縄文時代後期の土器片が出土している。また、第124-125号土坑からは後期および中期後葉の土器片が出土しているが、中期後葉の土器片は混入と考えられる。

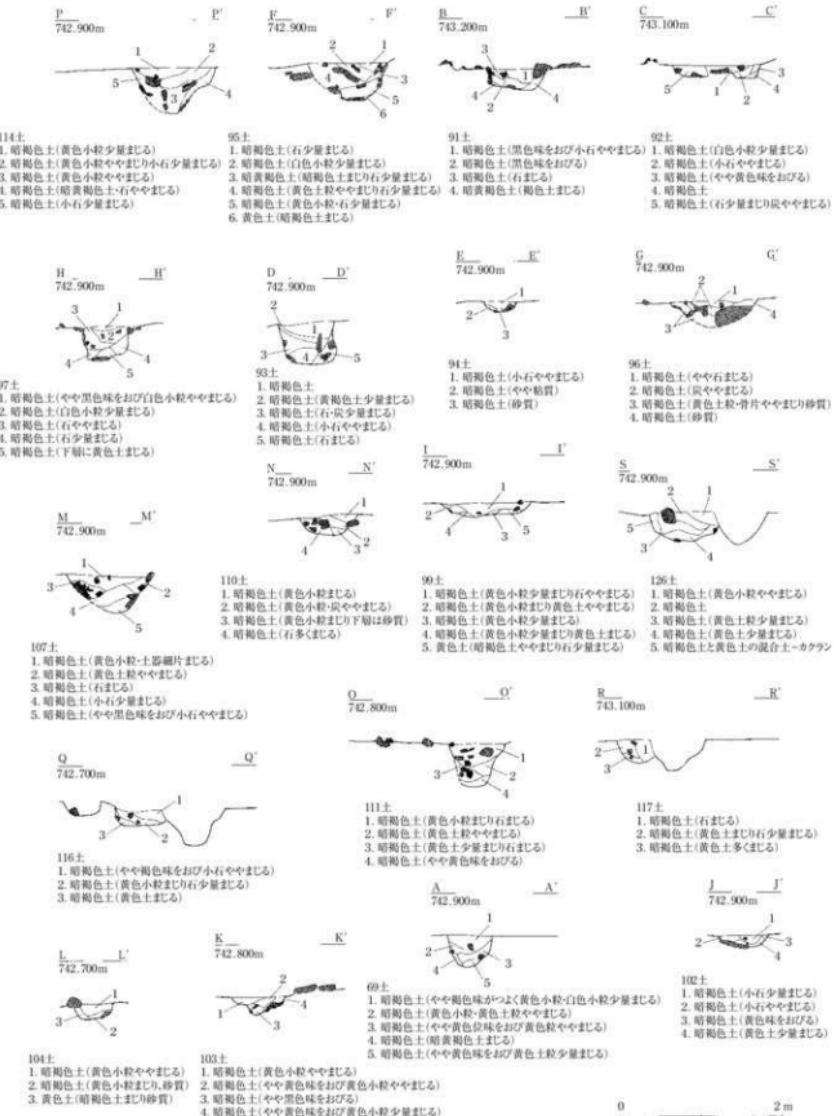


第30図 土坑実測図(8)

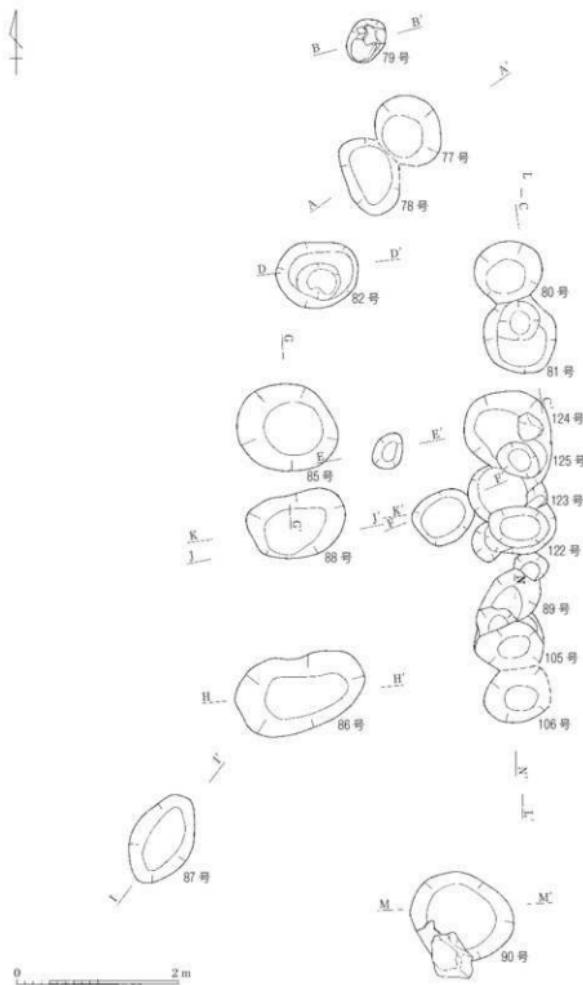


第31図 土坑実測図(9)

4. 土 坑

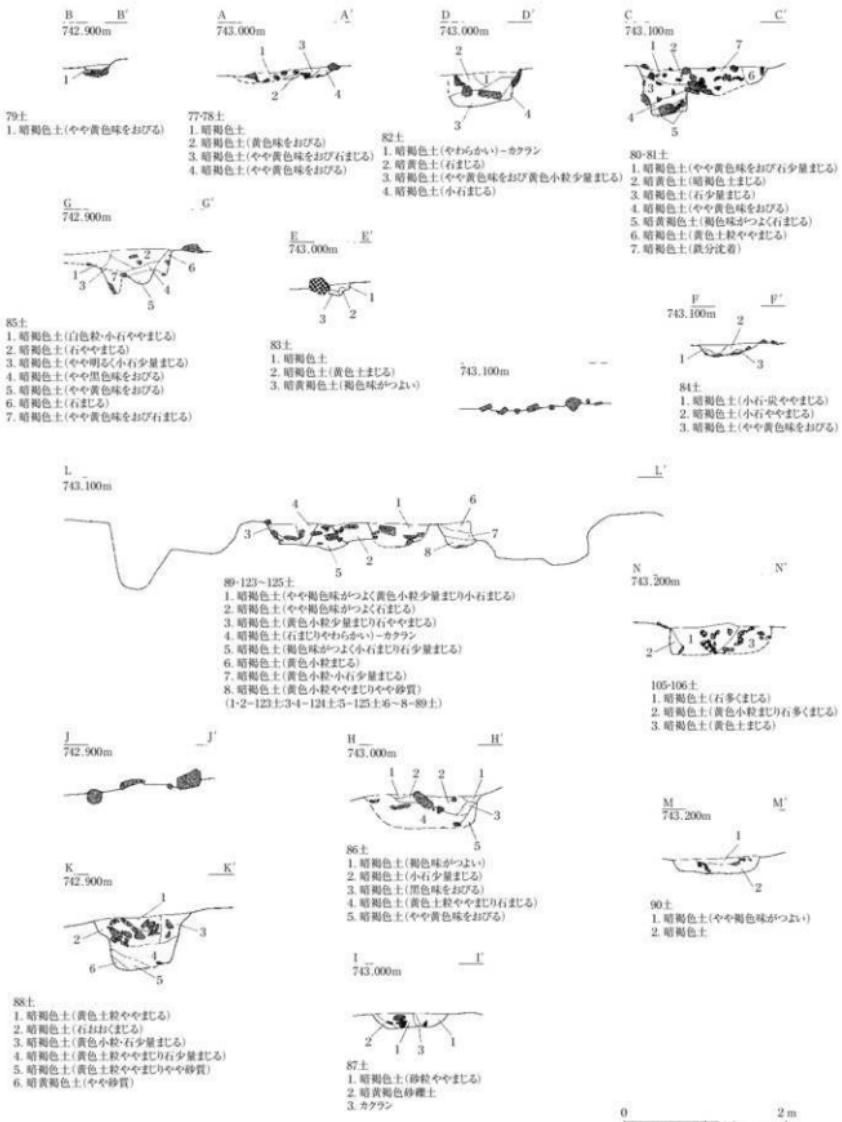


第32図 土坑実測図(10)

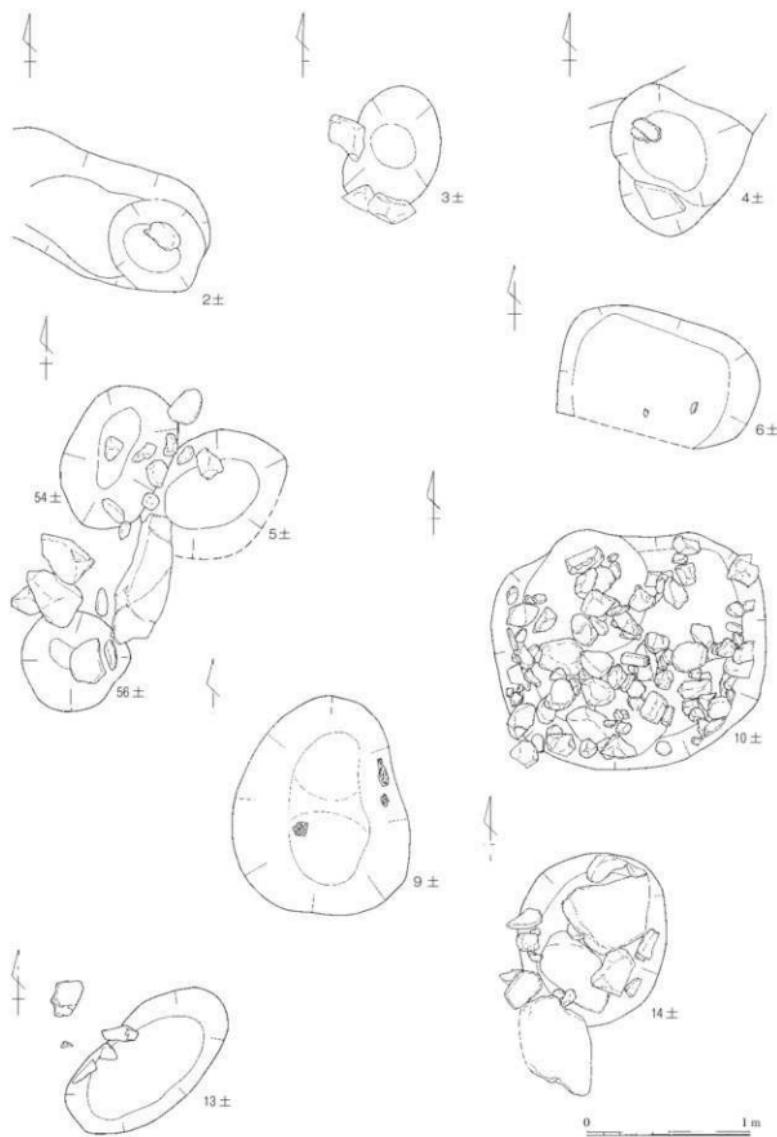


第33図 土坑実測図 (II)

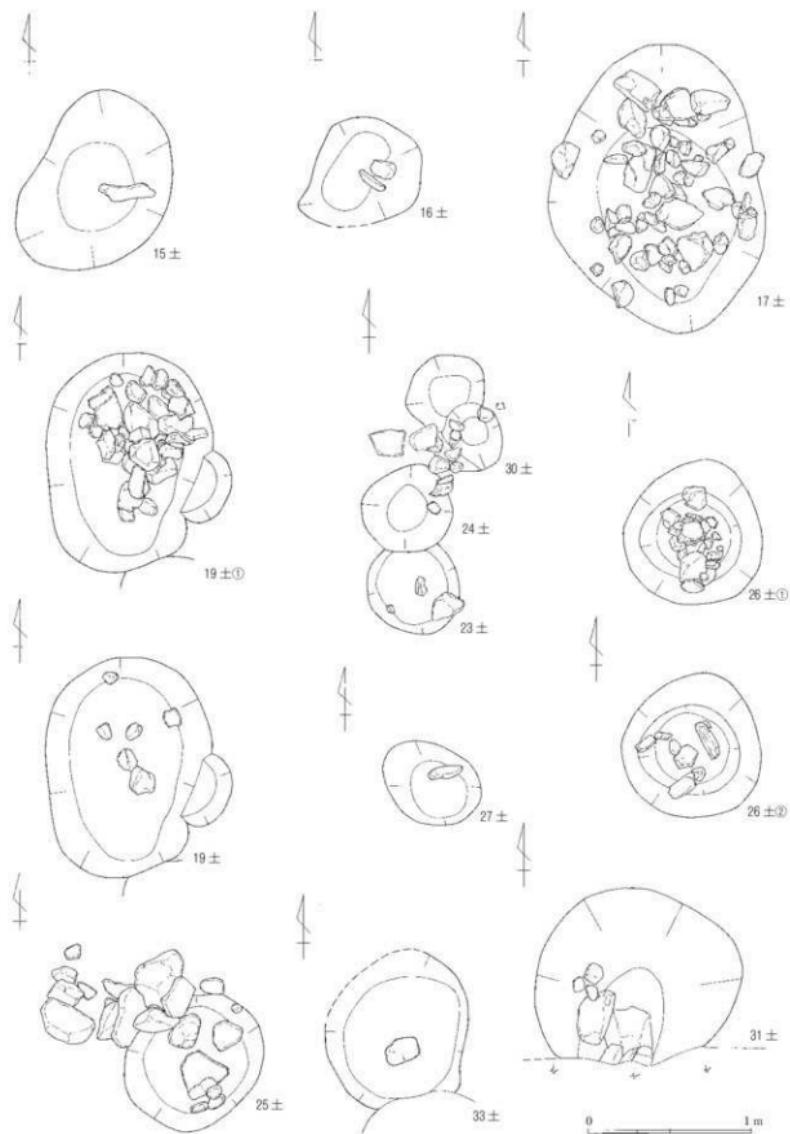
4. 土 坑



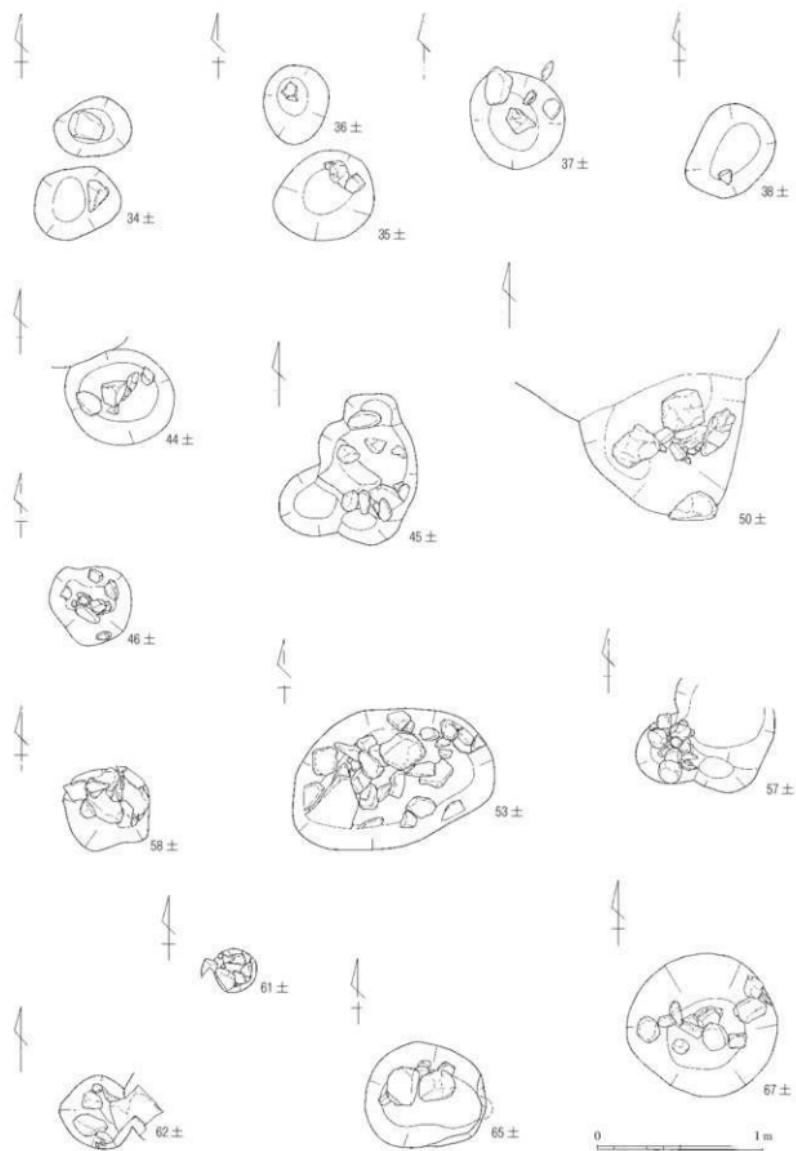
第34図 土坑実測図 (2)



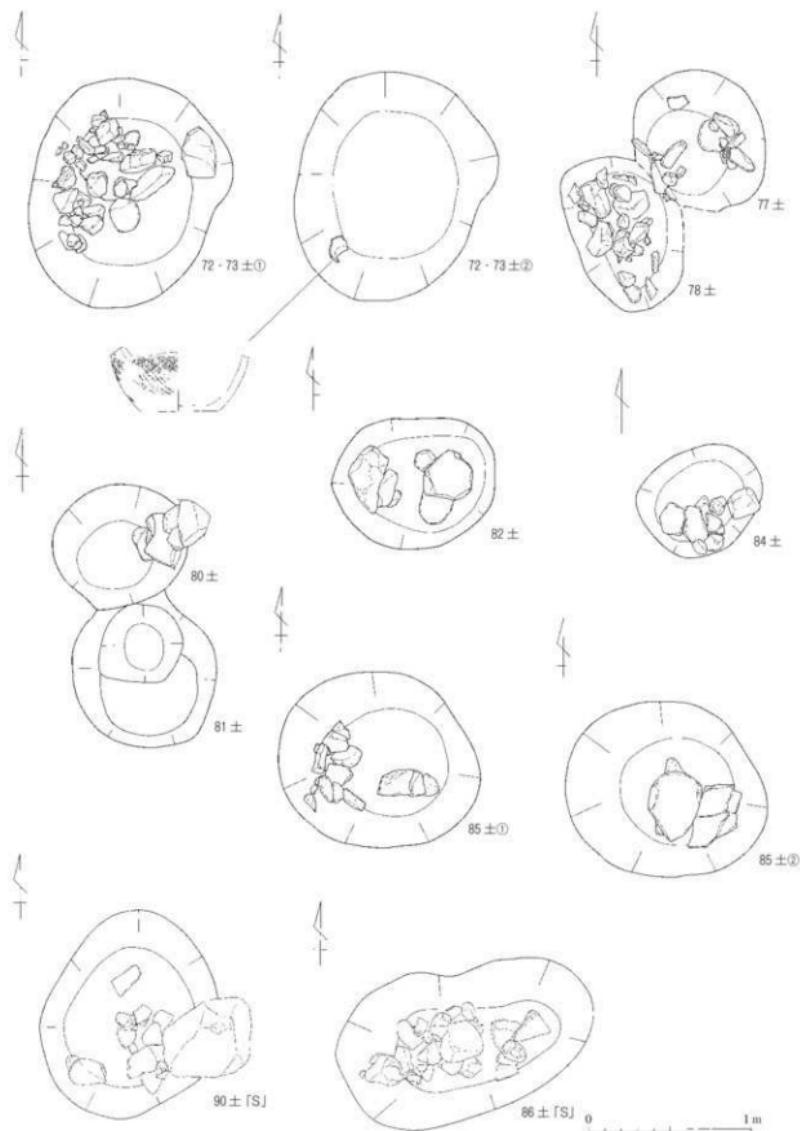
第35図 土坑出土状況図(1)



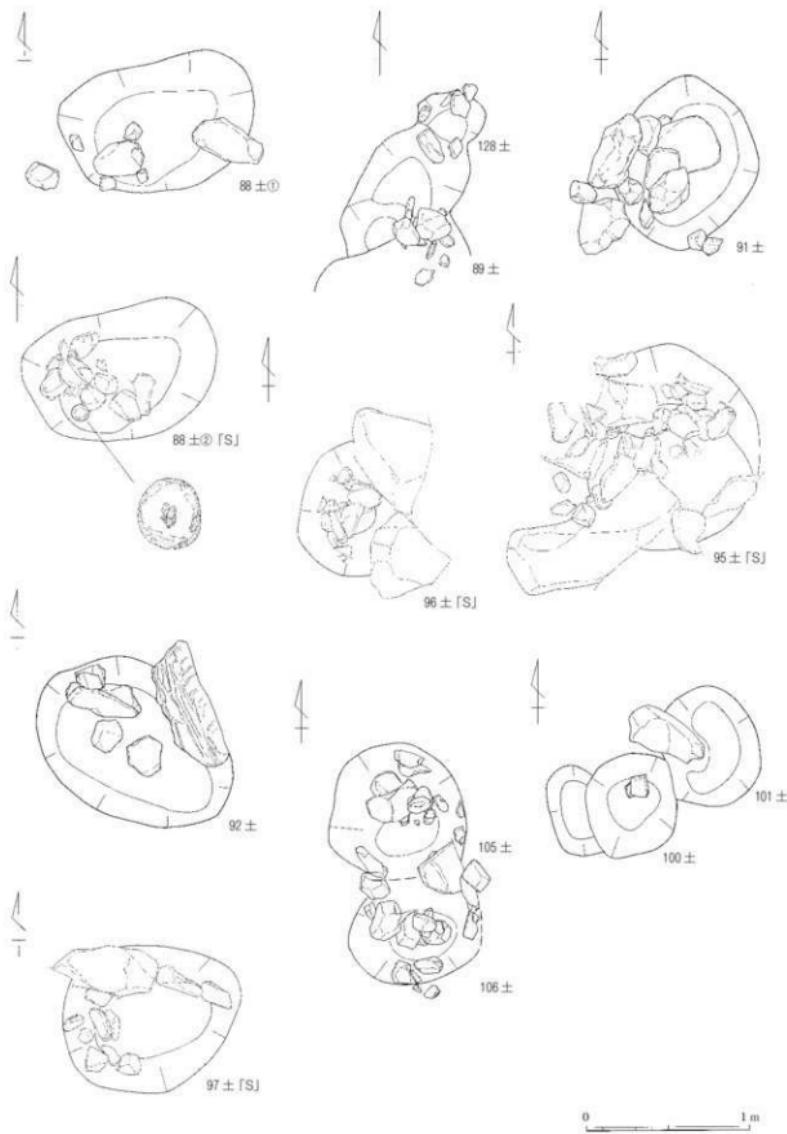
第36図 土坑出土状況図(2)



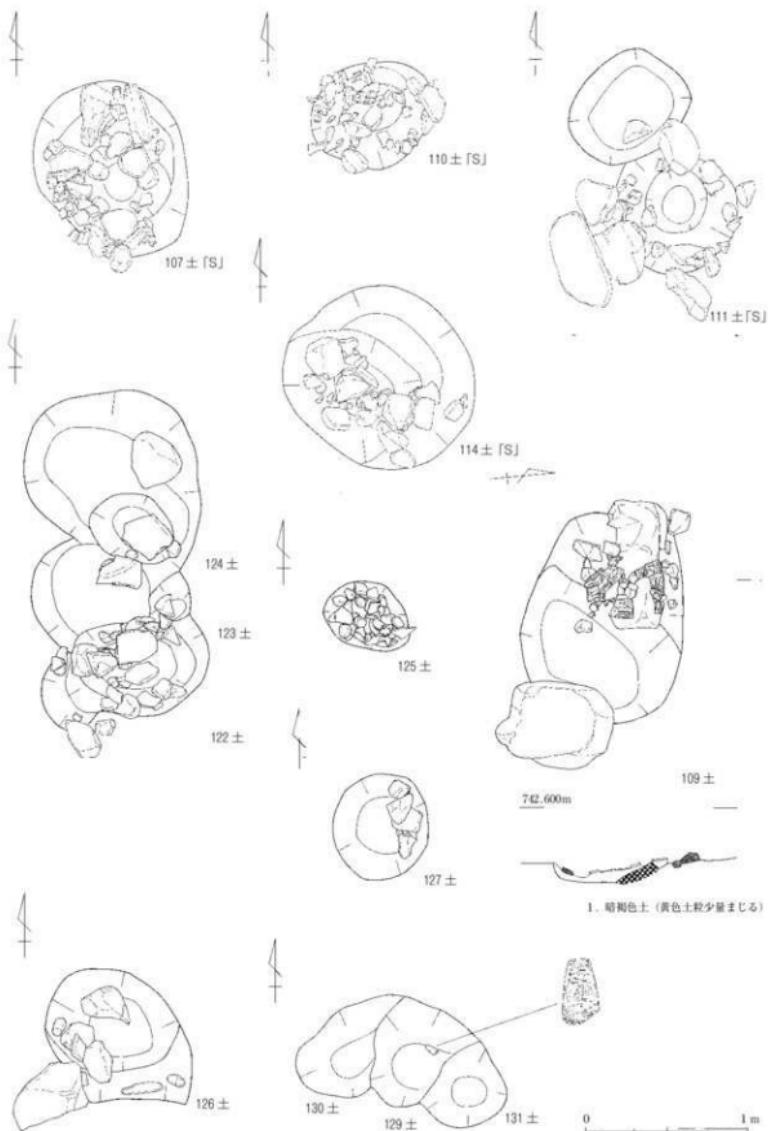
第37図 土坑出土状況図(3)



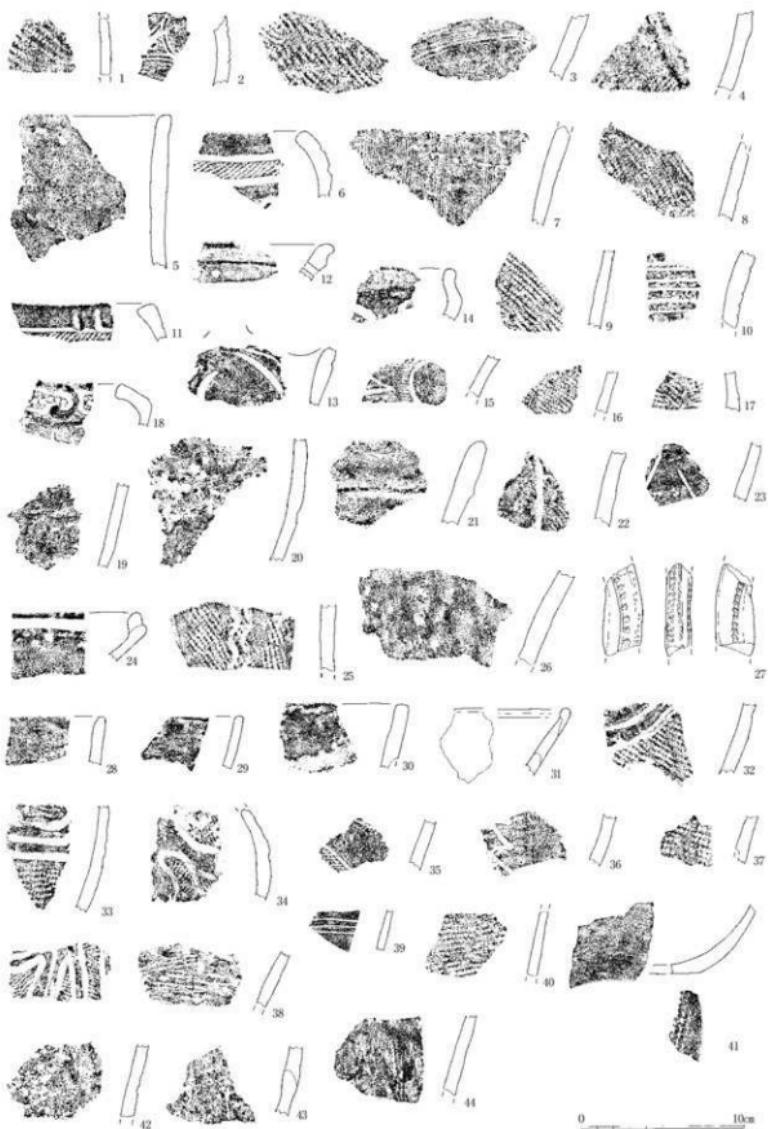
第38図 土坑出土状況図(4)



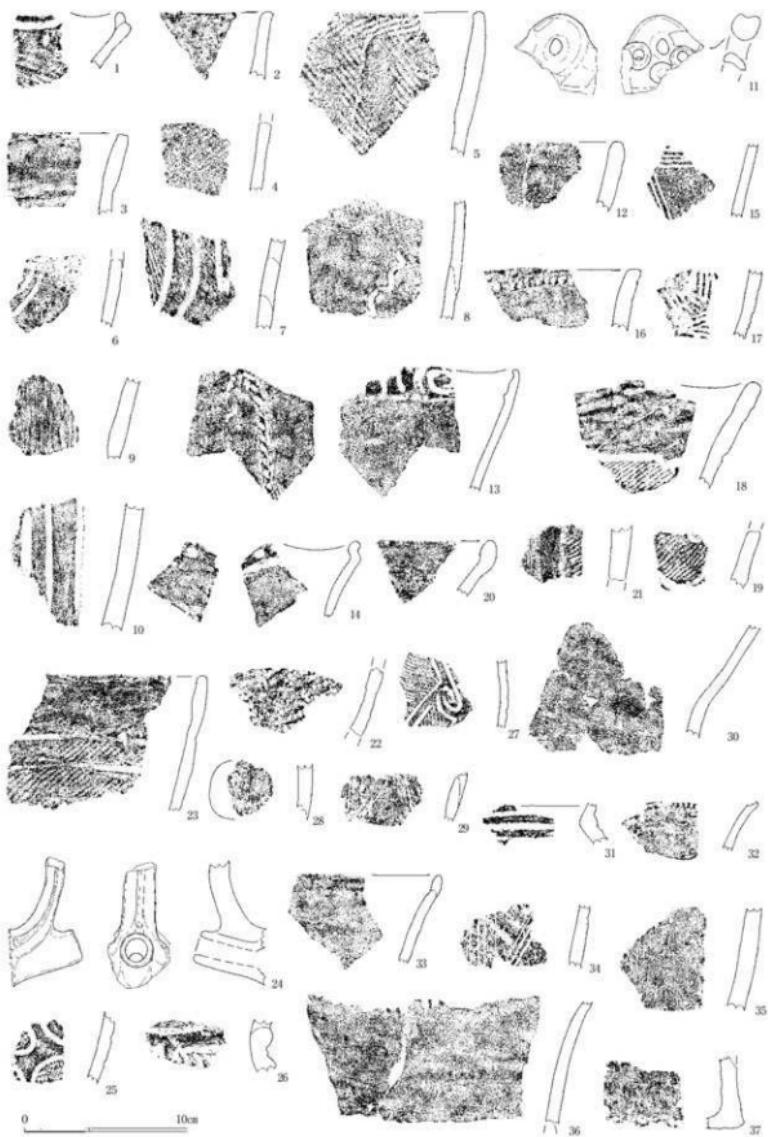
第39図 土坑出土状況図(5)



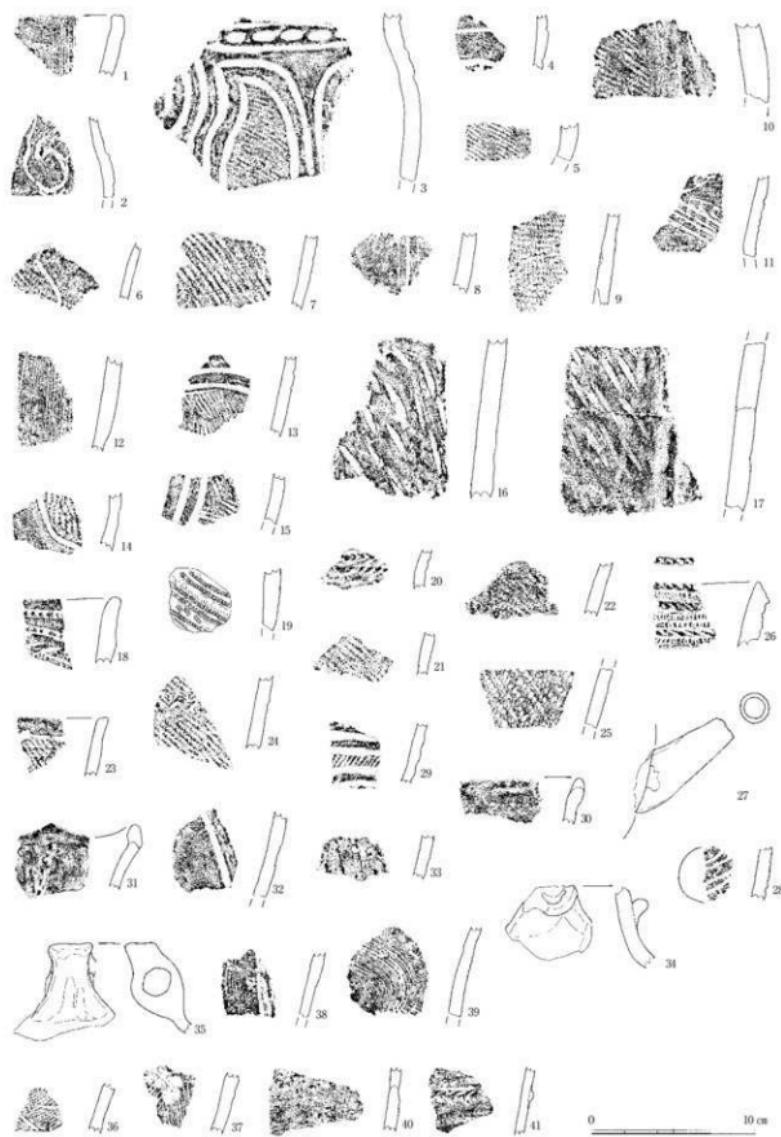
第40図 土坑出土状況図 (6)



第41図 土坑出土遺物 (1) (1: 2土, 2~7: 3土, 8~10: 6土, 11: 9土, 12・13: 10土, 14: 11土, 15・16: 16土, 17~20: 19土, 21・22: 23土, 23~26: 24土, 27~41: 25土)



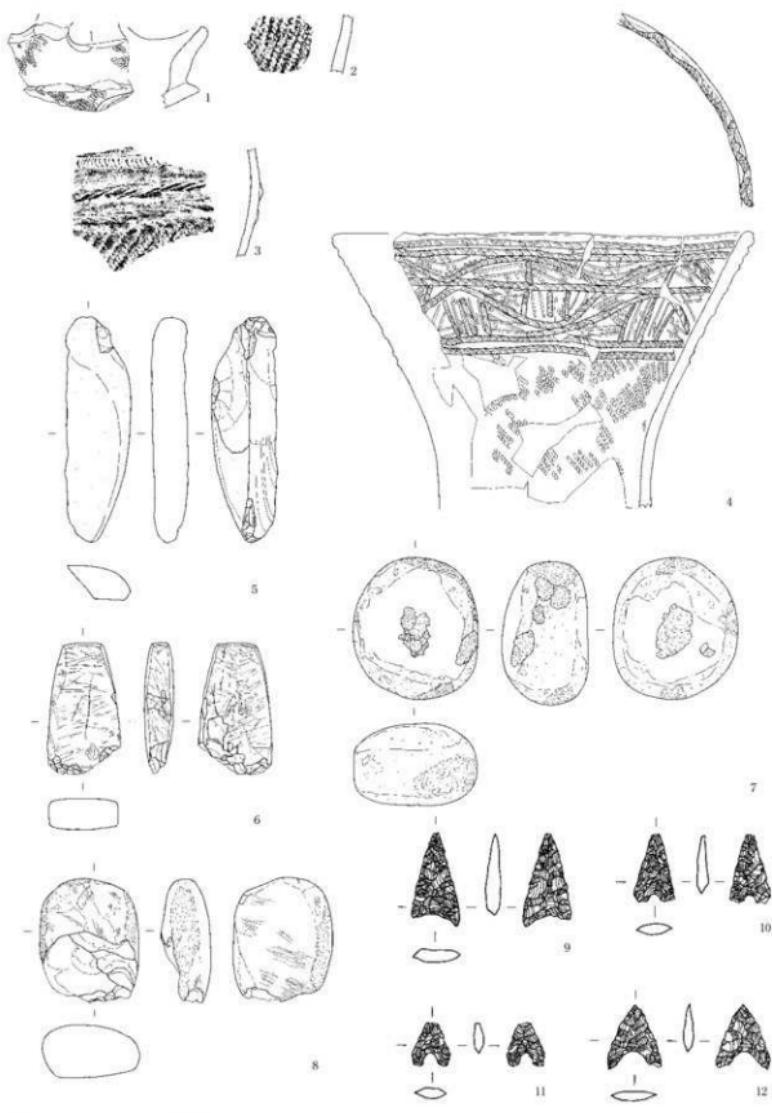
第42図 土坑出土遺物 (2) (1~8:26土, 9:31土, 10:37土, 11~12:46土, 13:56土, 14:60土, 15:63土, 16:64土, 17~19:65土, 20~21:68土, 22:69土, 23:70土, 24~26:80土, 27:81土, 28:84土, 29:82土, 30~37:85土)



第43図 土坑出土遺物 (3) (1~9: 86土, 10~11: 88土, 12: 90土, 13~17: 91土, 18~22: 92土, 23~24: 93土, 25~28: 95土, 29~30: 96土, 31~34: 98土, 35~37: 101土, 38~39: 102土, 40: 103土, 41: 104土)



第44図 土坑出土遺物(4) (1~5:105土, 6~18:106土, 19~21:111土, 22:112土, 23:110土, 24~25:112土, 26~30:114土, 31~33:116土, 34:122土, 35~36:123土, 37~39:124~125土, 40:127土, 41~42:125土, 43~47:126土)



第45図 土坑出土遺物 (5) (1・3・6:129土, 2:130土, 4:109土, 5:116土, 7:88土, 8:114土, 9:60土, 10:63土, 11:105土, 12:110土) (9~12:S=2/3)

5. 集 石

調査時点では9ヶ所を集石遺構と判断したが、整理段階において、これらの遺構を広域的に再配置したところ、配石遺構とするのが適当と考えられたため、それらを配石遺構として遺構名を付し、集石遺構からは除外した。その後、残された小規模な集石遺構について改めて遺構番号を付した。

なお、環状列石遺構についても、調査段階では7ヶ所と判断したが、やはり配石遺構に取り込まれる遺構が存在したため、それらを除外した後に遺構番号等を修正している。

集 石 1(第46図)

第II調査区のはば中央部に出土した。偏平な石を含む円礫が直径約2mの範囲に環状に配置されていた。中央部にサブトレニチを開坑し、下層部を確認したが、遺構は確認できなかった。なお、この集石は掘削地点から除外された地点となり、破壊を逃れたため埋め土保存された。

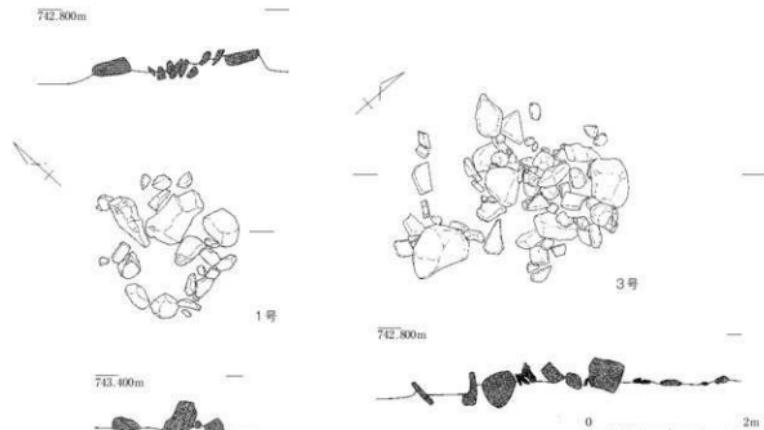
集 石 2(第46図)

第II調査区から出土している。1m×0.7mの範囲に石が集中している。なお、下層からは第95号土坑が検出されており、この土坑内からも多くの礫が出土していることから、土坑に伴う礫の可能性も否定できない。



集 石 3(第46図)

第II調査区から出土している。直径約1mに石が集中し、周囲を大きめの礫で囲み、その中に小型の礫が入れられていた。



第46図 集石実測図

6. 環状列石

環状列石1(第47図)

第II調査区南部から出土した。上層の礫群を除去し、遺構検出を行った際に出土した。このため、配石址の上層からの出土と考えられることから、単独遺構と考え、環状列石としている。

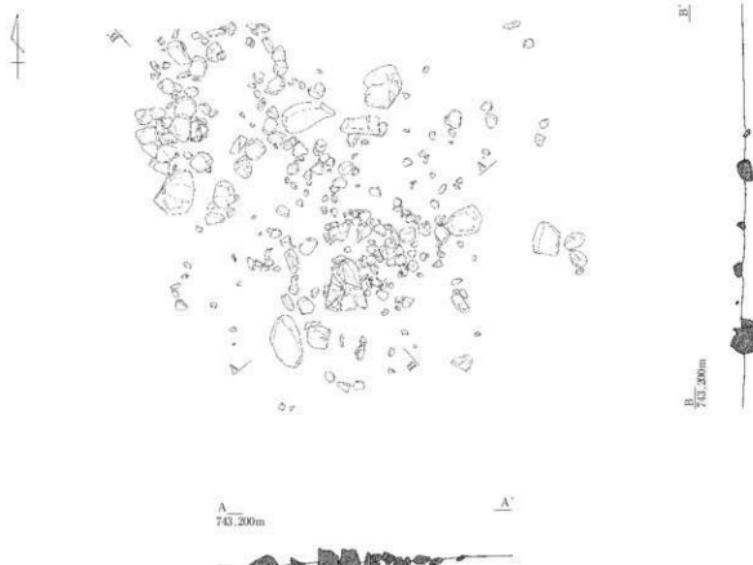
遺構の規模は、直径約60cmの大きさで3つに割れた礫を中心にして、その周囲を直径約1.5mのこぶし大の礫が、まばらではあるが環状に巡っていた。また、さらにその北部の外側を、人頭大の礫が推定直径約4mの弧状に並んでいた。この外周の礫は、その南部に試掘調査時のトレンチが深く掘りこまれ、東部についてはカクランが確認されていることから、環状を呈していたのか、もともと弧状であったのかは明確にできなかった。

なお、中心部の礫については、この遺構が構築された当時に割れていた可能性が高い。

環状列石2(第48図)

第II調査区中央部から出土した。上面の包含層を重機で除去し、遺構検出を行ったところ、地山面の直上で出土し、遺構の北部では一部地山が露出していた。

遺構の規模は、直径20~40cm大の礫を直径約50cmの環状に配置し、これを中心として直径約5mの環状に、拳大程度の石が並べられた状況が推測された。しかし、この付近には自然に流入したと考えられる礫も多数存在しているため、規模を明確に把握できていない。また、この地点は設計上遺構に影響をおよぼさないことが判明したため、埋め土保存された。



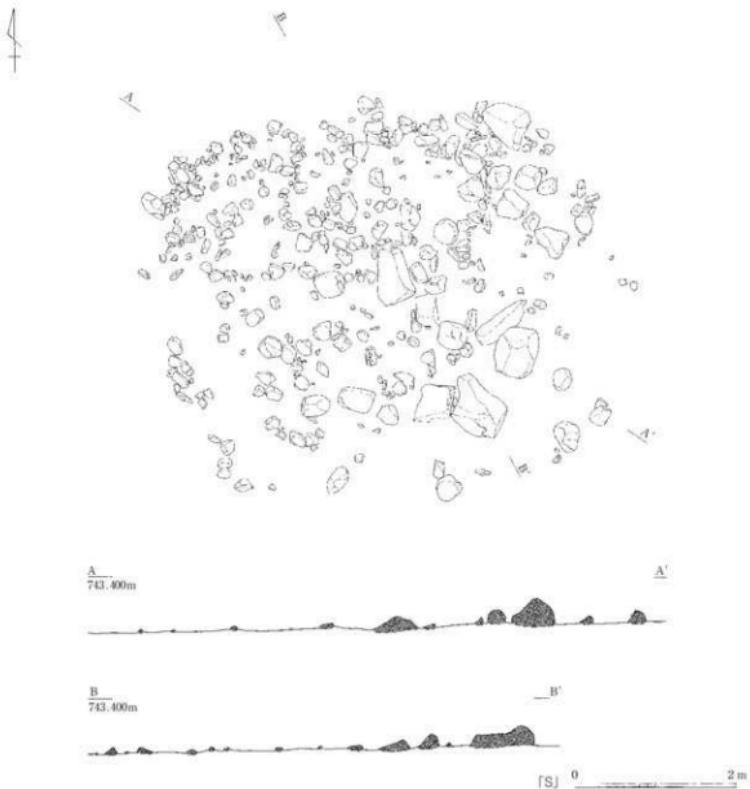
第47図 環状列石1実測図

環状列石3(第49図)

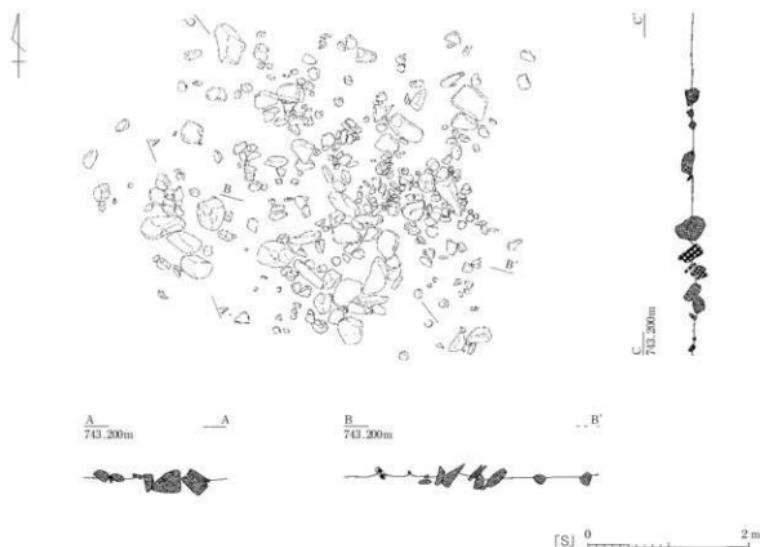
第II調査区の中央部で出土した。当初集石2とした遺構である。直径約4mの範囲に多くの石が立てられた状態で出土したため、遺構と判断した。

この遺構は、30~40cm大の砾を直径約1mの環状に配列している。なお、さらに1.5mほどの直径で、弧状に小型の砾を配している可能性もあるが、配列はあまり明瞭でなく、明確にできない。

また、下層からは配石址1(第50図)の中心部分付近が出土し、直下には、直径1mほどの環状に砾が配されて出土していることから、環状列石としたものの、配石址の上層部分に当たる可能性も否定できない。



第48図 環状列石2実測図



第49図 環状列石 3 実測図

7. 配石址

配石址1(第50・52図)

散在しているような上層の礫を除去すると、調査区中央部付近から、大きな弧状の配石址（第50図）が出土した。この道構は、試掘調査時に北部の一部を掘削して破壊してしまったものの、石が約2mの幅で帯状に半円を描き、空隙部を持ってその内側に小型の礫が、まばらではあるが弧状に並べられ、中心部分には人頭大の礫を数個伴った密集部分が存在した。

外環の石の帯は、西半部で途切れ、東半部には道構検出時から存在していなかった。また、南部についても、道構の重複があるのか、やや石の量が少なく、西部については1mほど円錐状に盛り上がって出土した。この盛り上がりについては、当初山地からの押し出しによる礫の堆積と考えたため、詳細な記録を残すことができなかった。

中心部分は、はっきりとしたプランは検出できなかったものの、前述通り礫が密集し、数ヶ所の環状配列を想定することができる。このため、環状に配された礫の中心部分については環状配石が複数存在した可能性も考えていく必要がある。

また、この配石址の東部に出土した扁平な礫を中心とした小規模な環状の配石については、独立して存在したのか、配石址1の中心部分の道構の一つなのか、今後検討していく必要がある。

なお、この複数の環状部分の上層で検出されたのが、環状列石3である。

配石址2(第51・52図)

配石址1の南部(第51図)には、東部に存在する直径約60cmの石の集中箇所を中心として、礫の配列はまばらであるが、確認できるもので、直径約1m、約3m、約5mの位置で、3重におよぶ弧状の列石が配置されていることが推定できる。これらの礫は直径約40cm程度から、10cm程度の大きさまで大小様々であり、配石址1のように比較的礫の大きさが揃っていたのとは対照的である。

また、弧状の列石の2重目と3重目の間に直径約60cmの石の集積地点が検出されており、直行する石の列も想定できることから、同様な形態を呈する配石遺構が重複して存在する可能性が考えられる。

のことから、配石址1より規模が小さいながら、中心部に明確な石の集積を伴う配石遺構が、複数回にわたって造られていたことが推測できる。

なお、この付近に散在する大型の礫については、東部の山地から押し出されてきたものと推定される。

その他これらの遺構の西部にも多数の礫が存在していたが、遺構として把握することはできなかった。

配石址3(巻頭図版3・付図2)

配石址1北部の、調査区北端部にも同様な礫の配列が確認でき、配石址と考えられるが、調査時にその存在を認識できず、詳細な記録を残すことができなかった。

全体測量図(付図2)及び全体写真(巻頭図版3)でみると、自然流入と考えられる巨大な礫の西部に、直径1m程の偏平な礫の集積地点を中心にして、検出範囲で、約2mの帯状に礫上部の高さを一定にして、弧状に並べられた様子がみられる。

更にその南部には配石址1や配石址3の弧とは対照的方向に、大小の礫を取り混ぜながら、明瞭ではないものの、幅約2mの帯状に広がる弧の一部が確認できる。

遺　物

これらの配石址からは、中期の石棒片をはじめ、磨石類および、後期の土器片が出土しているが、特に配石1の西部付近に遺物の出土量が集中していた。

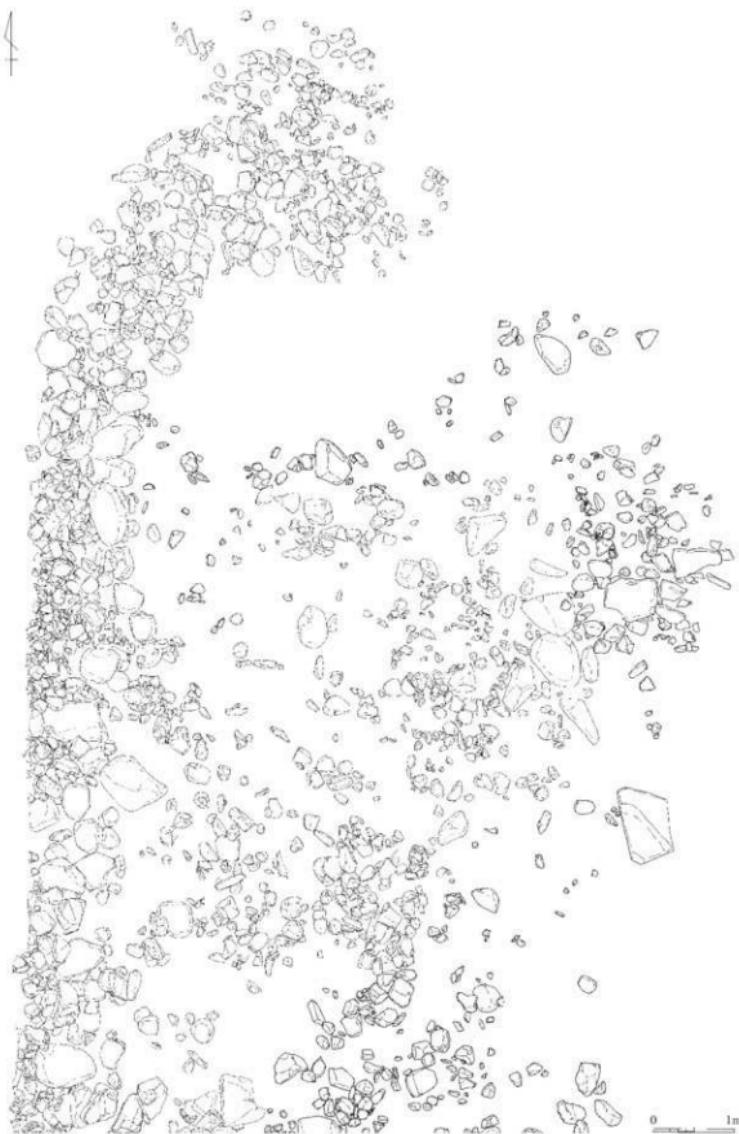
8. 磬　群

重機による表土除去作業中に礫が同じ高さでまとまって出土したため、遺構検出作業を行った結果、南北約10m、東西約5.5mの規模で礫群が出土した(第53~55図)。

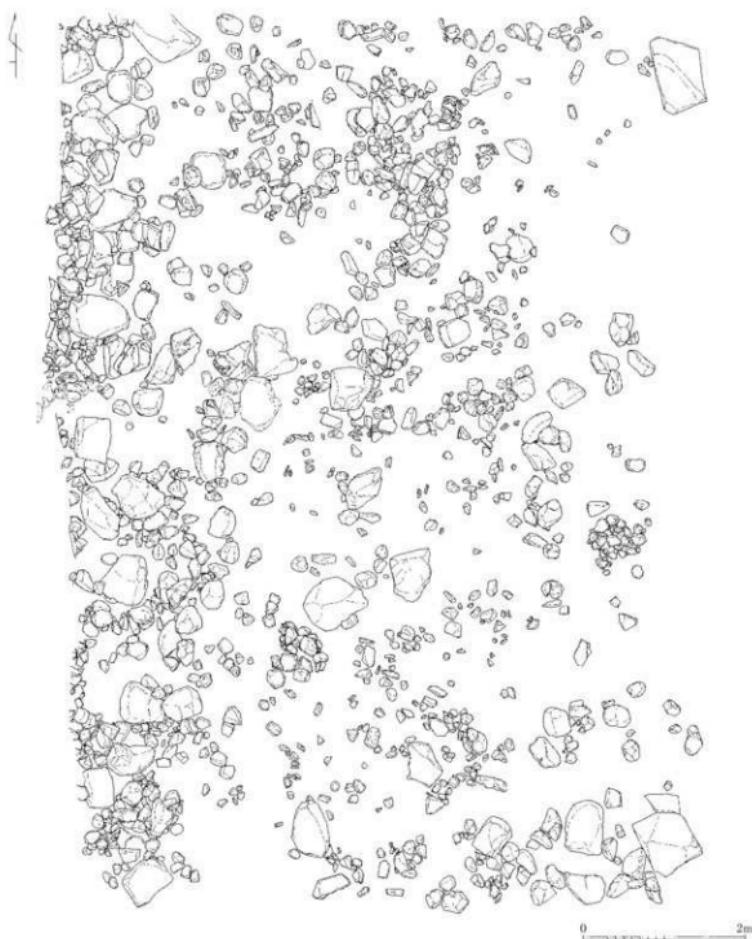
礫は調査区外の西側にまで広がっており、実際の規模はさらに大きくなると考えられる。なお、北西部の一部を表土除去作業時に、南部の一部を、試掘調査時のトレンチで破壊してしまっている。また東部にはカクランが及び、正確な平面形態は明確にできない。

これらの礫の上層には水田の基盤層が形成されており、時期的にはあまり古い遺構とは考えられないものの、大型の礫が上部を平坦にして並べられ、その間を小型の礫で埋めている様子が観察できることから、人為的な配列が読み取れる。また、遺構南部は拳大以下の小型の礫がまとめて出土しており、北部の遺構とは様相を異にしている。

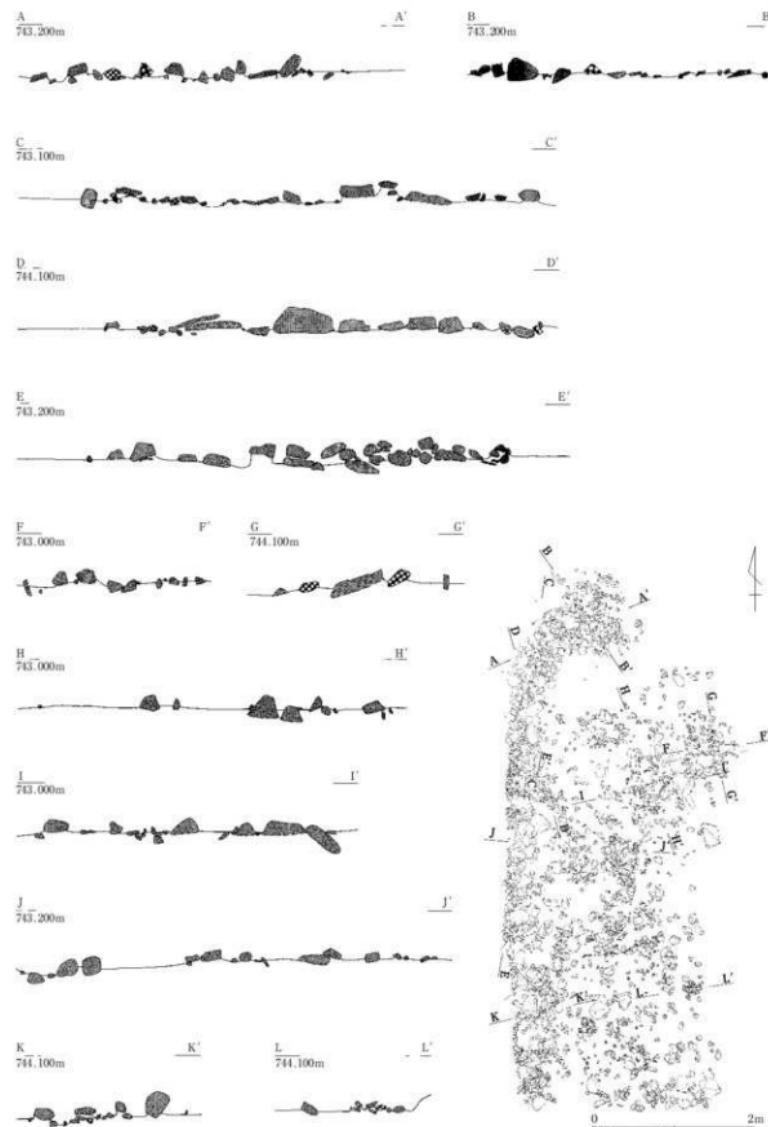
この遺構の時期については遺物の出土が少なく、時期は明確にはできないものの、大正末期にはこの周辺に建物の存在を確認できることから、近世から近代にかけての時期ととらえることができそうである。



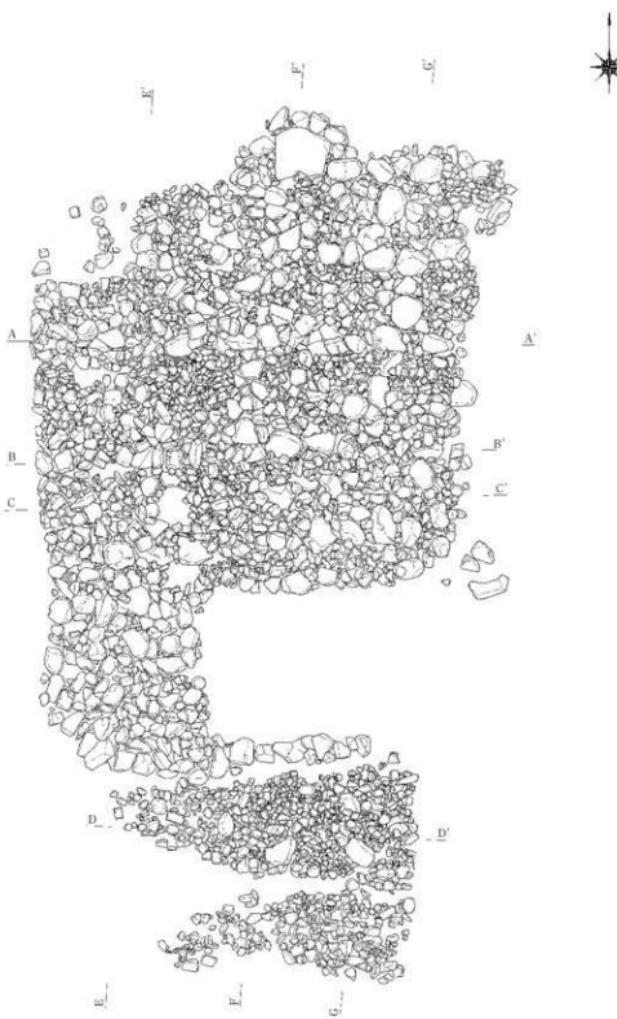
第50圖 配石址 1 実測図



第51図 配石址2実測図



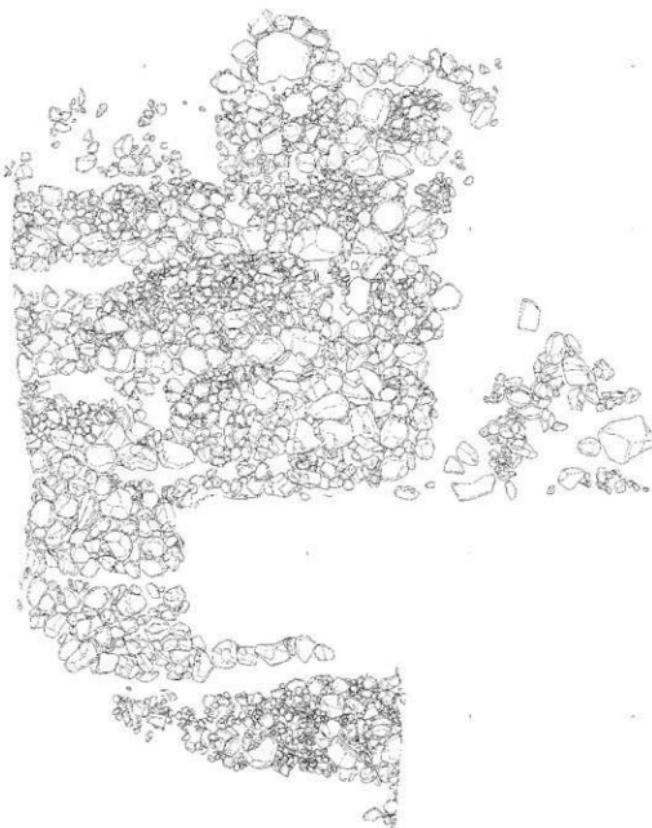
第52図 配石址土層断面図



「O」 0 2m

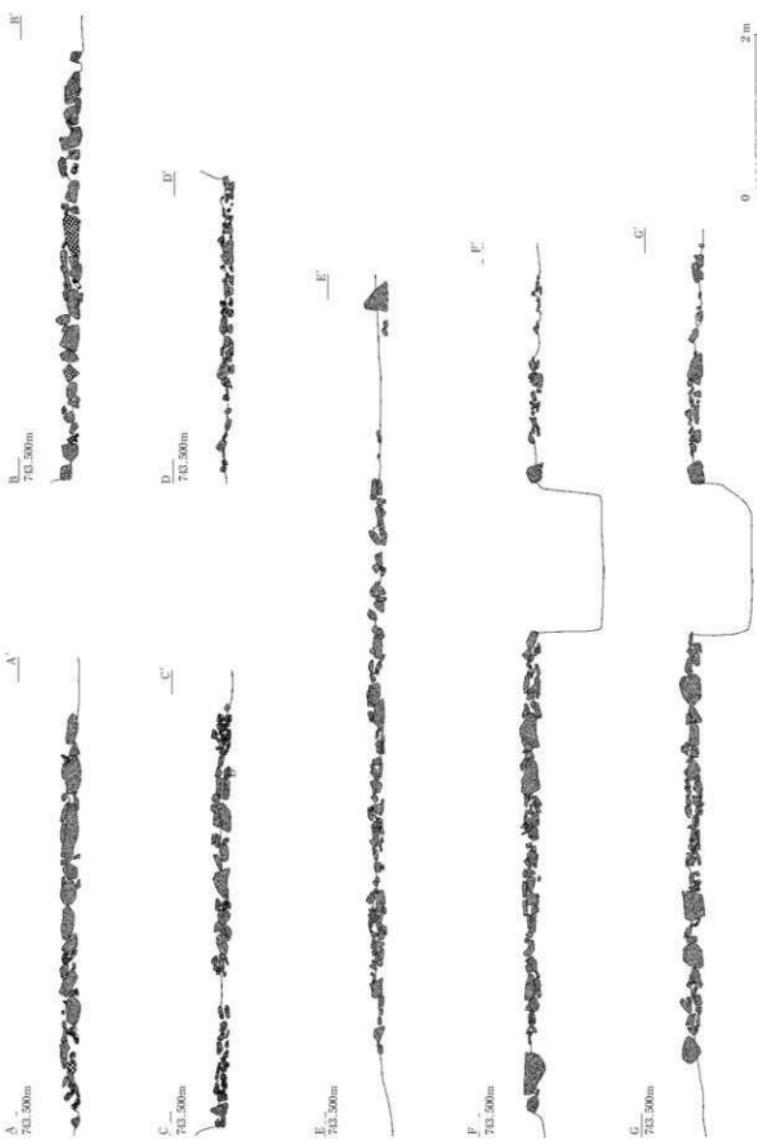
第53図 磬群実測図(1)

+



「S」 0 2m

第54図 碓群実測図(2)



第55図 確群実測図(3)

9. その他の遺構と遺物

第4号住居址上層出土遺物（第56図）

第4号住居址を検出し、調査を進めている時に土器を伴って焼土が出土し、その存在を確認した。この遺構については暗褐色系の土の中に存在し、土器が出土するまでその存在を認識できなかつたため、プラン等を検出することができなかつた。しかし焼土を伴い、ある程度器形の判別できるだけの土器が出土しており、縄文時代後期の遺構であったことは推測できた。

上層では、焼土の脇に疊と共に無文の粗製土器が小片で出土し、その遺物を取り上げると縄文を地文とする口縁部の破片や、粗いミガキ調整が施された土器片が集中して出土した。

遺 物（第57図）

この地点からは粗い調整痕をとどめた粗製土器の破片も多数出土しているが、紙面の関係で掲載を省略している。比較的大きな破片が24と25であった。

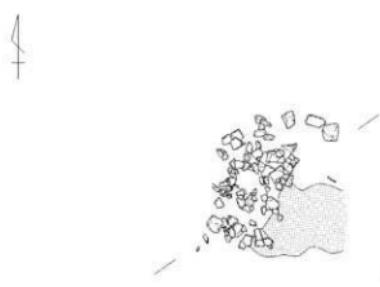
その他磨り消し縄文を伴い、器面を丁寧にミガキ調整した土器片（1～15）や、押圧隆帯を貼りつけている破片（16・22）が出土した。

18と19は破片が大きかったため、器形を復元している。18の外側は縄文を施した後に横位の沈線を施し、口唇部にはヘラ状工具によってキザミを施している。

19は口縁部上部に細いヘラ状工具でのキザミを伴う隆帯がみられ、体部には太い横位の羽状沈線を施した後に横位の区画の沈線文を引いている。また口唇部にはやはりキザミが施文されている。



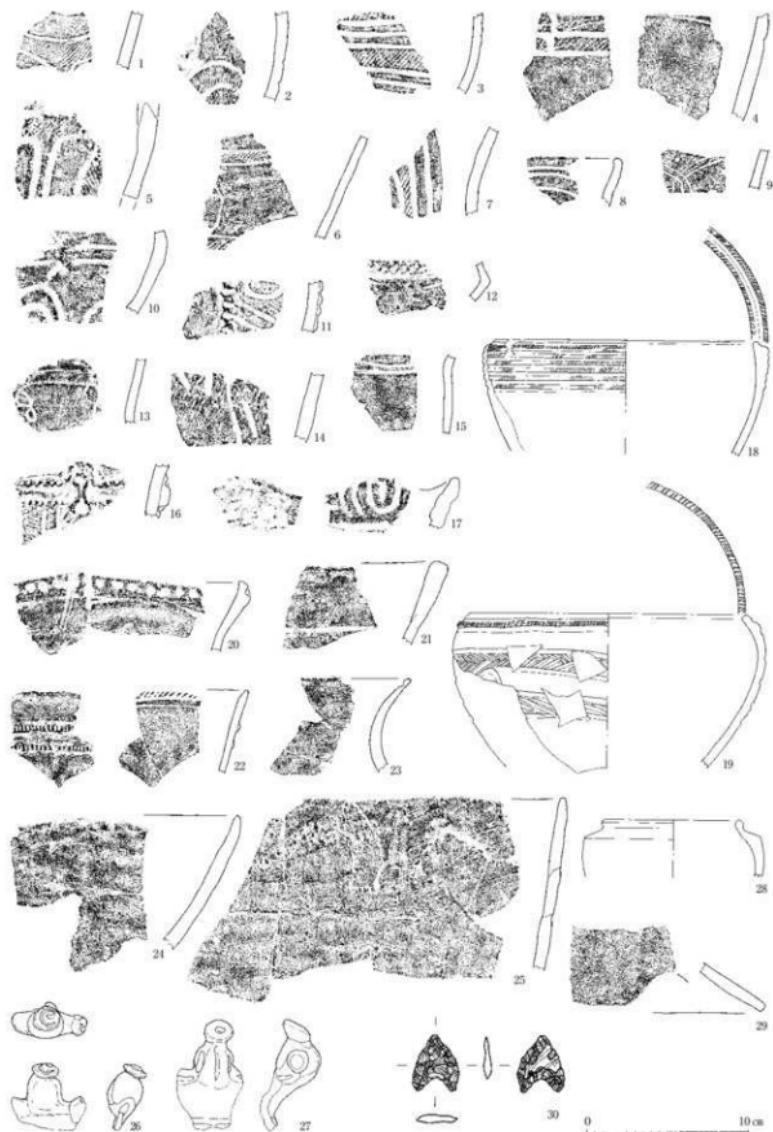
4住上層



4住上層その2



第56図 第4号住居址上層出土状況図



第57図 第4号住居址上層出土遺物 (30:S=2/3)

第V章 まとめ

今回の調査では、縄文時代前期の住居址と、後期と考えられる土坑墓が出土した。住居址については、諸磯a～b式土器を伴い、当該時期の遺構であることが判明した。また第1号住居址出土資料と第4号住居址出土資料が接合関係にあり、同じく第2号住居址と第4号住居址の出土資料が接合することから、これらの住居址がそれほど時間差なく存在していたと考えることができよう。

縄文時代後期の礫に関する遺構については、整理段階で充分な検討を加えることができなかつた。そのため、本報告書で示した遺構の把握状況と、その問題点を提示したい。

まず、重機の表土除去時に多くの礫が出土した際、遺構として認識できなかつたため、第1層目の礫の出土状況について記録に残すことができなかつた。このため、調査区内の礫遺構の最終形態を明確にできない状況となり、多くの情報を失う結果となってしまった。今回出土した礫のうち、いわゆる地山の石は円礫で、表面は赤味をもつ色合いであり、持ち込まれた礫は、角礫はもちろん円礫でも灰色味の強い色を呈していた。この分類基準をこの段階で明確にできなかつた事に大きな原因があつた。

これらの礫を除去し、第2層目を検出した段階で、小規模な単位で遺構を把握し、集石1～8、環状列石1～7（調査時遺構番号）として記録に留めた。しかし、整理段階でこれら的小単位の遺構を組み合わせると、配石址とすることができたため、調査区全体を巨視的に把握し、配石址に取り込むことが難しい遺構について集石及び環状列石として個別に報告することとした。

配石址は大きく3地区に分けることができ、このうち、北部の配石址1は、当初存在を把握できなかつたため、詳細な記録をとることができなかつた。しかし、写真や全体測量図から、帯状に石を敷いている様子を窺うことができる。また、中部に存在する配石址2は比較的大きめな礫を中心点にして、幅をもつた石の帯が弧状をなしていることがわかる。その南部の配石址3は、重複が激しく、詳細を明らかにできないが、数単位の弧状に並ぶ石の配列を把握することができる。

このように、調査段階での判断の甘さから多くの情報を失ってしまった感があるものの、縄文時代後期の遺構を把握することができた。今回は時間の関係上、現段階で把握できた状況を報告するにとどまつたが、今後この資料の詳細な検討が必要かもしれない。

次に遺物をみると、礫の検出作業時から後期前半期の土器片が多数出土している。これらの土器片はまだ整理中の段階であり、詳細を明らかにできないものの、礫の出土している層位では当該期の遺物が出土し、礫除去後の層位から縄文時代前期の遺物が出土し始めることから、配石址等に伴う遺物と考えられそうである。グリッドで取り上げたこれらの遺物の位置を確認しながら、遺構との関係を確認していく必要性を感じている。

土坑は、平面プランは楕円形と円形に大きく分けられ、その他に安定しないプランの土坑も出土している。また、骨の細片が出土している遺構もあり、それらが土坑墓であることが推定できた。これら墓坑と考えられる土坑については、覆土中から比較的大きな礫が出土しており、その中に拳大の円礫が含まれることが多かつた。なかには、磨石が底面に置かれていた事例や、遺構検出面付近で定角式磨製石斧が出土している土坑もあつた。

最後に礫群であるが、この遺構の直上は水田面であり、礫内にまで水田の基盤層としての黄色粘質土が食い込んでおり、直近にはカクランがおよんでいる状況であった。このため、時期は遡っても近世と考えられる。

報告書抄録

ふりがな	こえどいせき						
書名	越道遺跡						
副書名	地域優良賃貸住宅辰野町平出団地建設に先立つ緊急発掘調査						
著者名	福島 永						
編集機関	辰野町教育委員会						
所在地	〒399-0493 長野県上伊那郡辰野町中央1番地 ☎ (0266) 41-1111						
発行年月日	平成20年(2008年)12月16日						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
越道遺跡	長野県上伊那郡辰野町大字平出2355番地 2外	20382	66	35°57'52"	137°58'37"	20070920 ～ 20080402	780m ²
所取遺跡		種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	
越道遺跡		集落 墓域	縄文時代 中近世	住居址 土坑 集石 環状列石 礫群	4 131 8 7 1	縄文時代後期土器・石器 縄文時代前期中葉土器	
特記事項	当初自然堆積として考えていた礫は、縄文時代後期の遺構であることが判明した。また、その下層からは同じ時期の土坑墓を中心として、縄文時代前期中葉の住居址等が発見された。						

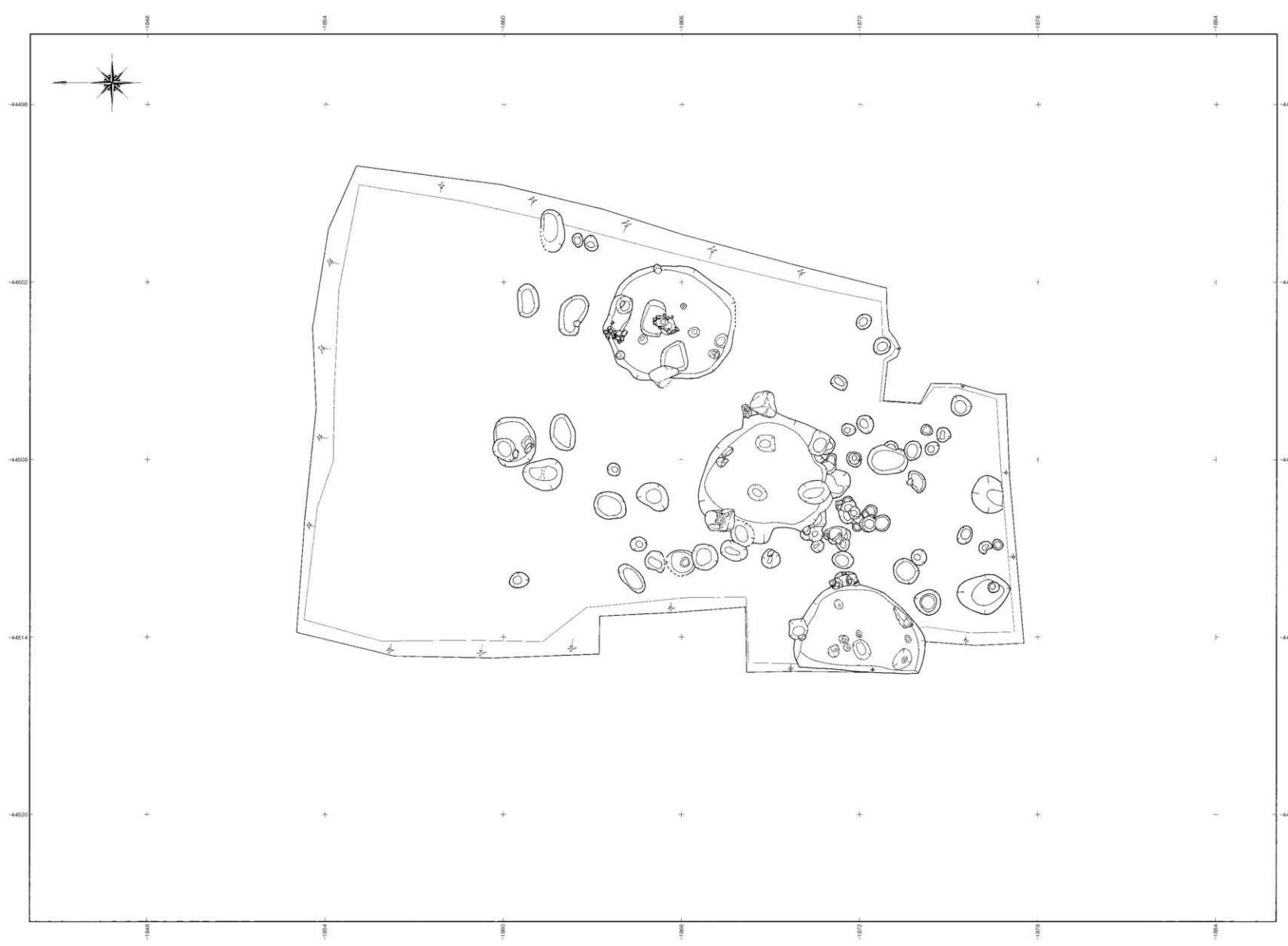
越道遺跡

地域優良賃貸住宅辰野町平出
団地建設に先立つ緊急発掘調査

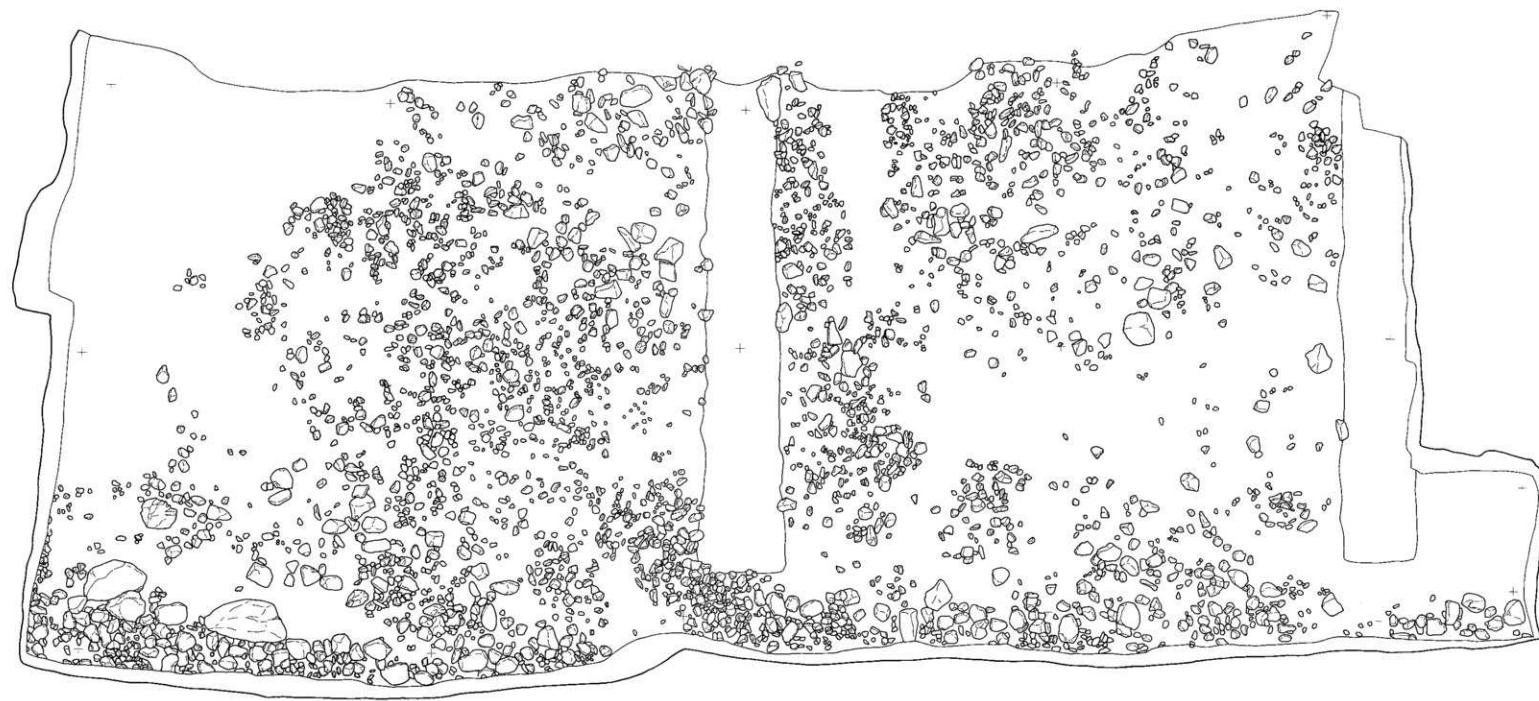
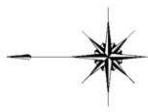
平成20年12月16日発行

編集辰野町教育委員会
発行長野県上伊那郡辰野町中央1番地

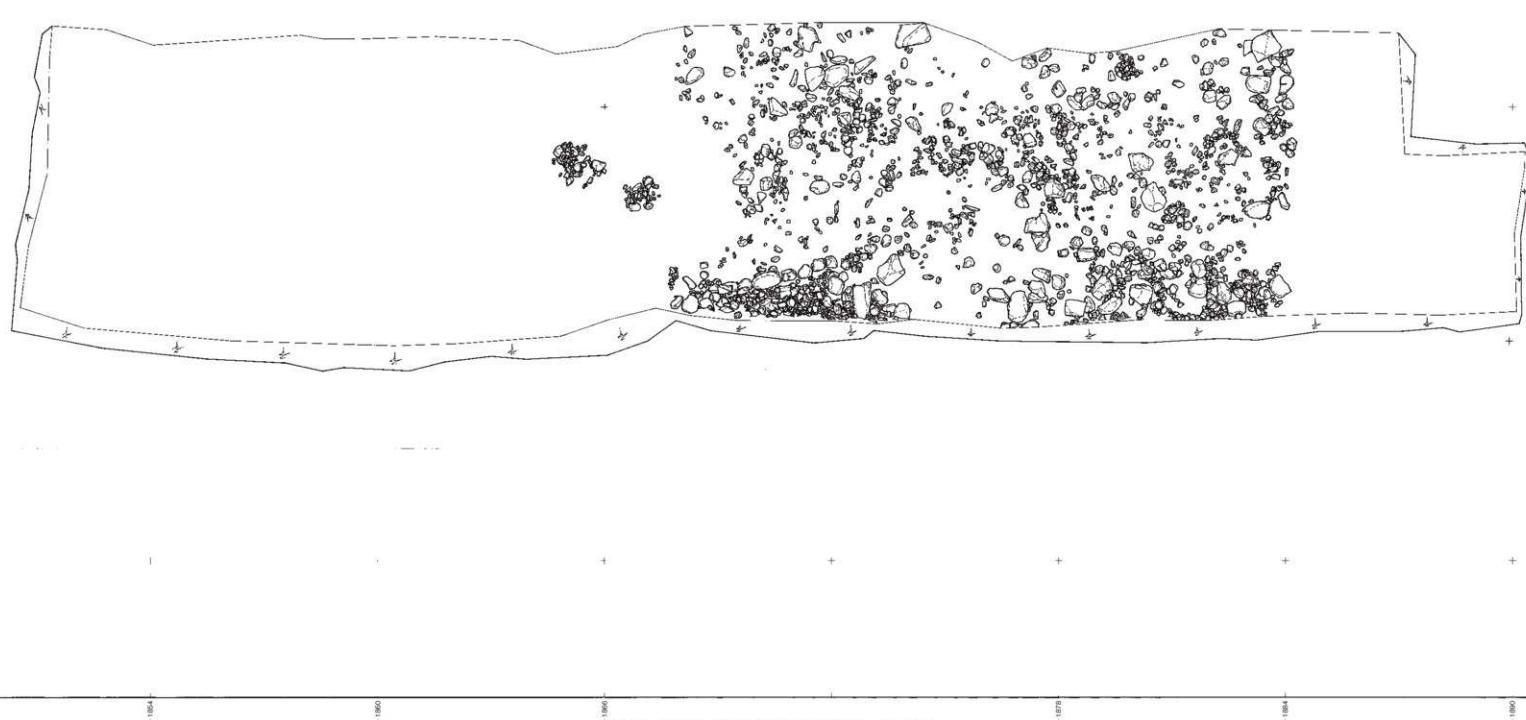
印刷ほおづき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
☎(026)244-0235㈹



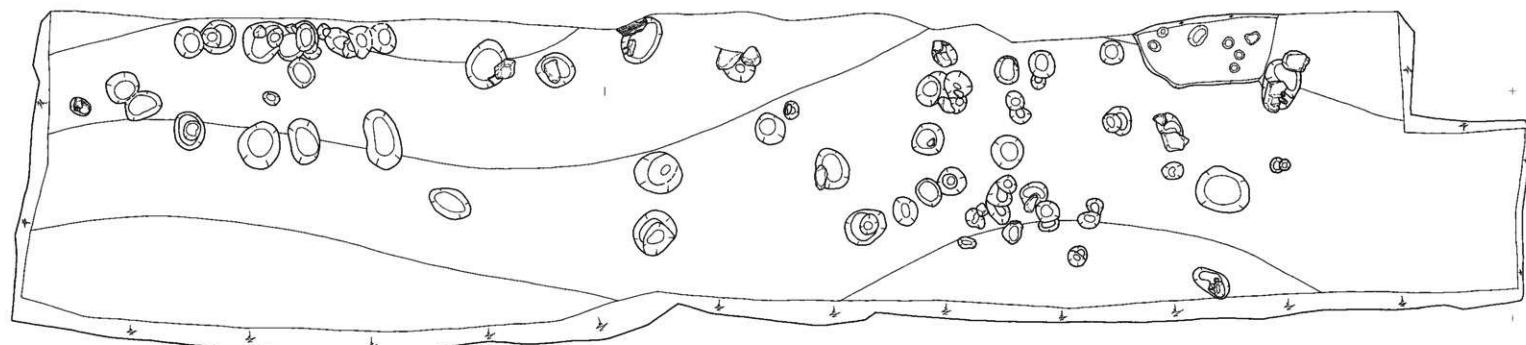
付图1 越道道路 第1调查区全体測量図 (S=1/100)



付图2 越道道路 第II调查区第2层全体測量図 (S=1/100) 「O」



付图3 越道跡 第Ⅱ调查区第3层全体測量図 (S=1/100)



付图4 越道道路 第II调查区第4层全体测量图 (S=1/100)

K O E D O S I T E